慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	死者と生者 : 中国貴州省苗族の祖先祭祀
Sub Title	The dead and the living : ancestor ritual of Miao tribe in Guizhou Provinve, China
Author	鈴木, 正崇(Suzuki, Masataka)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2002
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・ 文化・ コミュニケーション No.29 (2002. 10) ,p.55- 102
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20021031-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

死者と生者—中国貴州省苗族の祖先祭祀—

鈴　木　正　崇

1. はじめに

死という人間にとって避けて通れない普遍的現象には，悲しみと喪失，葛藤と恐怖など複雑にからみあう感情が表出している。死者と生者を結ぶ死の儀礼はこの危機的な状況を乗り越え，心情におぎないをつけ，生と死の境界を流動化させて，社会関係を再編成する。中国貴州省東南部の苗(ミャオ)族の場合，死の儀礼は葬儀よりも，漢語で吃牯臟(チーグーザン)，牯臟節(グーザンジエ)，鼓社節(グーシャジエ)などと呼ばれる祖先祭祀が重視され，13年目ごとに数多くの水牛を供犠する大規模なものである。1949年の中華人民共和国成立以後，こうした行事は政治や経済，或いは社会の大変動で中止を余儀なくされたり，大きく内容を変えるなどの変遷を経たが，近年になって盛大に復活しつつある。丑年や寅年に執行されることが多く，1978年に改革開放が始まって以後，初めての丑年・寅年にあたる1985・86年には各地で行われた［鈴木1992］。しかし，当時は外国人には未開放とされ現地で見ることは難しかった。その後，12年が経過し1997年（丑年）と98年（寅年）に各地で執行され，筆者は97年11月には黔東南の雷山県烏流寨で見学する機会を得た［鈴木1999］。その後，更に他の地域と比較するために，1999年（卯年）に，黔南地区の都柳江北岸の山中に位置する小脳(シャオナオ)村（三都水族自治県都江鎮所在）に10日ほど滞在して祭祀の記録をとった。以下は祭祀の報告とその考察である。

祖先祭祀をはじめとする死の儀礼には「文化の集団的英知」が多数集積されているという見解がある［メトカーフ・ハンチントン1985：14］。確かに死の儀礼は我々に生きることの意味を問い掛けはする。しかし，儀礼自体に死生観や世界観が凝結しているというよりも，その実践を通じて様々な観念を再構築したり，状況を変化させて新たな生成へと向かわせるような力の媒体として作用することも多い。そして，外部者には非日常的体験で深遠な知恵が内蔵されていると考えられた儀礼が，当事者には日常性との連続性の意識の中で展開しているなど，非日常性の強調も再考の余地があり，儀礼の研究は曲がり角に立

たされている。また，社会主義国家の中国という現地調査のやりにくい土地で，祖先祭祀の期間だけ村にいて考察することは極めて限定されている。そして，中国社会が劇的に変動を遂げ急速に変化を続ける現状があり，今回の儀礼だけで世界観を導き出すわけにはいかない。こうした限界を自覚しつつ，苗族の祖先祭祀の特定村落での事例に限定し，死者と生者の関係に注目して，人々が一体なにを求めて儀礼を行うのかを考えてみた。

2. 祖先祭祀

苗族の祖先祭祀の名称は，清水江流域や雷山などの黔東方言北部土語ではノン・チャン・ニュウ（nex jangd niel, nex jangd niul 努姜略），ノン・ニュウ・ヘネ（nex niel hek nes, nex niul haok nes 努略好奴），ノン・ニュウ（nex niel, nex niul 努略）などという。これに対して都柳江流域やその南岸の月亮山（ユエリャンシャン）（主峰は海抜 1490 m）周辺など黔東方言南部土語を話す地域ではノゥン・ニュウ（nongd niel, nongd niex 努堯）という。ノンやノゥンは食べる，ニュウは鼓を意味し，直訳すれば「鼓を食べる」となる。漢語風に表現すれば「吃鼓」であり，現世的行為たる「食」と，他界との交流の接点の「鼓」を通して，長き年月を経た死者を祀る祖先祭祀（祭祖）である。小脳でもノゥン・ニュウという。牛の皮をはった木鼓（ムーグゥ）（楓樹で作る木の太鼓）を祖先の霊魂の拠り所とし，鼓を叩く音で霊魂を呼び起こして祖先と交流し，水牛を殺して祖先と共に他界に送り，現世の人々は肉を共食する。漢語では吃鼓臓，吃牯葬，牯臓節，吃群鼓，吃社鼓，或いは意訳して殺牛祭祖，祭鼓，祭鼓節，祭木鼓，祭鼓吃牛ともいう。廷貴（李廷貴），酒素，潘光華など苗族の研究者は「鼓社節」という名称を提唱した［廷・酒 1980，潘 1981］。苗族の祖先祭祀は，血縁の繋がりを持つものが集まって，牛の皮をはった木鼓を祖先の霊魂の宿る楓樹から作り祭具として血縁集団で祀ることから，漢族社会の祭祀組織である「社」に類似した機能があると考えて，チャン・ニュウ（jangd niel）を「鼓社」と訳した。鼓社に慣習法と長老を合わせて苗族の社会の三大支柱とする説もある［廷・酒 1981］。しかし，「鼓社」の用語は余り定着していない。従来の報告では，ナウ・フーナウ（脳福脳，能扶類）と記載されているが，オス牛を殺すという苗語を漢語で訛って写した表記で好ましくない。総じて漢語では「吃牯臓」「牯臓節」と訳し，牯はオスの水牛で，その肉や内臓を食べる祭りの性格を強調している。小脳では「牯葬節」と表記するが，本論では便宜のために，近年になって多く使用されている「牯臓節」を使用する。

この地域の苗族は死者が出ると大規模な葬儀は行わず，豚二頭ほどを殺して親族や親友

を招待して埋葬するだけである。本格的な葬儀は13年目に一回のノゥン・ニュウ，つまり牯臓節であり，沢山の供物を捧げ牛を殺して死者を祀り，その霊魂を祖先の故地に送り返す。祖先の故地は，月亮山に伝わる古歌ウークォケーチャオ（無郭格吊）によれば，ノンイェワンチー（能也望去）という大海の浜辺で，移動して貴州（黔）と広西（桂）の境界地のノンタンウータン（能党烏党）に到達し，そこで牯臓節を始めたという［貴州民族研究所編 1983：186－189］。行う年は村ごとに異なるが，子・丑・寅の各年に多く執行され時期は旧暦10月以降である。寒い時期が選ばれるのは，農閑期で人手があり，長期の祭祀でも食物が腐らない時期だからだという。小脳の場合，老年での通常の死亡の時は，村の背後で東南方に聳えるウェンテュウメイ（vend diub meif，馬背山）という山の彼方の埋葬地に死体を埋める。死穢の意識が強いためである。その後，毎年の清明節や七月半などに墓参りにいくことはない。幼児や18歳以下の子供，異常死を遂げたものは区別して埋葬するという。牯臓節には葬儀の色彩があり，漢語の牯葬節という表記はその感情を取り込んでいる。苗族のように血縁を重視し父系氏族の機能を重んじる社会では，祖先祭祀の意味は極めて大きい。

ノゥン・ニュウ，つまり牯臓節の由来については様々な伝承がある。都柳江一帯の苗族村落では，綺麗で聡明で強い力を持つ不屈の女性英雄，ワンチャイェ（wangljaxyeil，杰旺買耶）を記念するという話が流布している[1]。彼女が月亮山で蜂起した日を記念して青年たち，ワー（wab，湾）が歌舞を奉納するという。別の話では，祖先は川に沿って遡ってきたが，その中にいた女性ニュップックが，途中で虎に噛まれて死んでしまったので，この悲劇を記念して祀る。寅年に行うのはそのためだという。小脳に来ていた榕江県興華郷高排村の村長は別の話を伝えていた。それによると，大昔，祭りの度ごとに人々は村の中央の広場（坪壩）に木鼓を置いて叩き，周囲では人々が舞をまった。昔，苗語でウーグィ（五果。漢語では古州，つまり榕江）と呼ばれた都柳江の上流地域に，トテ（柮徳）という女性がいて，祭りの時に太くて長いニュウジン（紐禁）という木鼓（丈八左右。両手を伸ばした長さの四倍）の周りで熱心に舞をまっていたが，突然に木鼓が倒れて下敷きとなり圧死した。このために当時の苗族は動揺して協議の結果，新しい木鼓を作り直しアイニュウ（哎紐）と呼んで，これを叩いてトテを偲ぶと共に死者と祖先を祀ることになったという。このように牯臓節の来歴を語る伝承は，史実に結び付けようとするもの，身近な祖先の出来事に由来するものなど様々で，牯臓節の差異にも関連するらしいが，祖先の中でも悲劇の死を遂げた女性を祀ることが強調されることが多い。

榕江の文化館の楊方明によれば，祖先祭祀，いわゆる牯臓節にも色々と種類があり，都

柳江北岸の小脳・高排・控炕の一帯ではニュウ・ヨンイェ，「蓉耶牯臓」を行うという。楊の説明では，牯臓節は七種あり，ニュウ・パンケン（niel benb genb。夯鶊鼓。虎にかまれて死んだ女性のパンケン（夯鶊）を祀る。水牛の首を縛って谷に落とす），ニュウ・ワンチャン（niel wanglqangl。男性の祖先，ワンチャン（妄強）を祀る），ニュウ・タナ（niel dabnab，男性神の太陽，タナ（裕娜）を祀る。解放前まで），ニュウ・ティヨ（niel diob。天上から木鼓を持ってきた蟹，ニュウ・ティヨ（紐習）を祀る），ニュウ・ウッェ（niel ebzel。火塘での祭祖。五徳の前に置くオーチェー（甌折）という缶に米の澄汁を入れて祖先を祀る。悲しい雰囲気が漂う），ノゥン・ニュウ（nongd niel。本源の始祖を祀る），ニュウ・ヨンイェ（niel yonglyeil。蓉耶鼓。本根鼓 niel benb。美しい女性の祖先を祀る）があるという[2)]。特定の牯臓節と限定出来ないが，始祖の蝶々，メイパンメイリュウ（mais bangx mais lief，misbangxmis lief），胡蝶媽媽（フーティエマーマ）を祀るという伝承もある。天地創造にあたり蝶々が12の卵を生み，人類はその一つから生まれた。その後に雷公との抗争で洪水が起こり，瓢箪に乗って生き残った兄妹が結婚したという。従って，究極の祖先は胡蝶媽媽だが，女性の始祖であるとも言える。ニュウ・ヨンイェは計画郷や興華郷に多く，ニュウ・パンケンは三都で行われる。今回の小脳の牯臓節は正確にはニュウ・ヨンイェであるという。但し，このような牯臓節の分類は文化館の調査担当者という外部者の知的な判断によるものであり，地元ではノゥン・ニュウといって，漠然と始祖や祖先を祀る祭祖（祖先祭祀）と考えている。

3. 祭祀の日程と内容

小脳村で13年目に一度の祖先祭祀として，卯年の1999年に行われたノゥン・ニュウ（吃鼓）は八日間で，旧暦では11月16日から23日，申日から卯日，新暦では12月23日から12月30日までであった。日程は，12月22日（旧暦11月15日，未日）：起鼓と請祖霊（祖先の霊を呼ぶ）。23日（申日）：早朝に牯臓頭が家々を回る。昼間は客人迎え。24日（酉日）：客人迎えに引き続き，祭場の牛塘で「大型祭幡遊塘」を行い，祭祖方傘を引き回す。夜は跳月塘の盧笙舞。25日（戌日）：盧笙舞。26日（亥日）：牛塘で牛を引き回す「転牛塘」。27日（子日）：殺牛用の木組みを準備。28日（丑日）：早朝から「転牛塘」。殺牛の準備を行う。29日（寅日）：真夜中の午前二時過ぎに水牛を殺し明け方に解体する。昼間は共食をする。30日（卯日）：客人が帰り，封寨して鬼を祓う，である。殺牛祭祖に伴い闘牛（牛打架）を牛塘で行う慣行もあったが，長く中断していたの

で今回は組み込まなかった。

小脳の隣接地域でも牯臓節が執行されている。例えば小脳の東方の榕江県控坑村（コンカン）では，前回は1989年に90頭の水牛を殺して祖先や死者を祀った（人民政府への届出は16頭)。場所は八開と榕江を結ぶ公道から4キロほど登った所で，村長の王明亮の話では，一日目（亥日）：進客（客人迎え)，二日目（子日）：人跳舞盧笙（盧笙吹きと舞踏)，三日目（丑日）：拉牛踩塘（水牛を引き出す)，四日目（寅日）：殺牛（水牛を殺す)，五日目（卯日）：散客（客人が帰る）である。次回は2001年12月の予定だという。

榕江県興華郷高排村では1995年正月に七日間で行われた[3)]。八開から榕江への公道から北方へ30キロ，標高600メートル，240戸で1200人の村である。殺した水牛は200頭を越えたという。日程は正月一日（酉日）：客を寨に迎え入れ，銅鼓を叩いて祖先を招く。二日（戌日）：家の中の火塘（囲炉裏）で祖先を祀る。三日（亥日）：正午過ぎに家族ごとに牛塘に行く。奇数の竹杆の幡，苗語でいうとシーヤオをつけ，Y字形の竹（タータ）を割って音を立てて客人を迎える。銅鑼と盧笙に合わせて隊列を組み牛を引き回す，四日（子日）：水牛を牛塘で引き回し背中に泥を塗って豊かさを祈る。泥は米と金の意味で双方が家にもたらされることを願う。五日（丑日）：鬼師が水牛の前でアヒルを殺す。水牛にとりついている良くないものを追払う。殺牛用の木組み，ギィ（抵）を用意する，六日（寅日）：早朝に殺牛祭祀を母方オジ（舅舅）が行う。七日（卯日）：客人は水牛の肉を土産に帰途につきその後は村を閉じる（封寨)。高排村には現在，銅鼓はあるが木鼓はないという。

この二つの牯臓節の日程は小脳とほぼ同じで水牛を寅日の早朝に殺すことは共通している。殺牛の日を寅日とする理由は，虎は水牛を怖がるからとか，女性の祖先が虎に襲われて死んだのを偲ぶためだ，という説明を受けた。牛と一緒にアヒルが殺される理由についてはやや複雑である。牛と羊の関係についての話から始まる。牛はノロノロし羊は素早いので，牛と羊は仲が悪くよく喧嘩をする。一般には人間は羊に罪や穢れを負わせて殺害または追放するが，数年に一度という祭祖は大規模なので羊では到底背負いきれず牛に負わせることになる。牛と羊は代替可能である。しかし，牛は殺されて祖先と一緒にあの世に行く前に，アヒルを殺して罪や穢れを負わせて一緒にあの世に連れて行く。牛と羊とアヒルなど動物たちは相互に代替の関係にあり，祖先の伴をすると共に罪の贖いを負う。

1996年12月に都柳江南岸に聳える月亮山の山中，榕江県計画郷加両寨で行われた牯臓節の日程は次のようであった［徐1998：32，1997：127]。12月12日（旧暦11月2日，申日）：進入準備。起鼓を行う。木鼓を叩いて祖先を招き，盧笙が鳴らされる。牯臓頭が

豚を殺す。13日（酉日）：溝通各方。客人を迎えてもてなす。各家で豚を殺す。銅鼓を叩く。盧笙隊が寨を回り，牯牛師が各戸で祈念して祖先に告げる。昼間は酒を酌み交わして，夜は対歌をする（12日～14日）。14日（戌日）：分簸箕飯。旗手を先頭に牯牛頭や盧笙隊が隊伍を組んで牛塘に向かう。糯米飯と豚肉を村人に平等に分け与え，酒を振舞う。家に持ち帰って火塘で干魚を添えて祀る。娘は盛装して盧笙舞を舞い，夜は対歌をする。15日（亥日）：牽牛転塘。牛塘に水牛を一戸から一頭出して三度回り，天地祖先に殺牛の開始を告げて祖先を偲ぶ様々な祭品を捧げる。16日（子日）：殺牛祭祖。早朝に牛を殺して祖先を祀り夜明けに解体する。17日（丑日）：分肉送客。肉を分配して友人を送る。18日（寅日）～23日（未日）：停鼓封寨。客人を全て送り出した後に，村を閉め，青年男女を三日間，村の外に出す。木鼓を叩くことを停止し，井戸を封じ掃寨で村を清め，鬼を駆逐する。24日（申日）：祭祀終了。13日目で一切が元に戻る。小脳との違いは，盧笙隊の村巡りを丁寧に行い，牛塘に糯米飯と豚肉を持ち寄って平等に分けることで，幡や傘の行列の内容も異なる。

牯牛節では，殺される牛である「牯牛」の選定と，行事の責任者である「牯牛頭」の推挙に関して十分に検討する必要があるという。「牯牛」は勇猛で善い性質の牛で，「毛旋」（渦巻き状の毛）が上半身に位置することを見極める[4]。「毛旋」の位置が定まっていない牛は，「眼泪牛」「抹泪牛」といい眼前が潤んでいるので，「牯牛」にしない。水牛は一頭殺すごとに50元の税金をとられるので，小脳の吃牯牛は20頭と申告したが，実際には50頭から60頭を殺す。今回のために一頭4600元（1999年当時1元は約13円）で町から買ってきた者もいる。豚も客人用に殺すが税金は20元である。これも300～500元で購入してきた者がいる。村長によれば，今回の総費用は牛，豚，酒など合わせて60万元と考えているが，実際には100万元以上かかるだろうと言った。村落はここ数年の間，急速に経済生活を上昇させてきたが，未だ豊かではない。「一年の牯牛節で，十年辛苦を味わう」という諺の通り，今回の祖先祭祀を行うと貧乏になってしまう。再び，少しずつ蓄えを増やして次回の牯牛節をつつがなく行う。これは苗族の生き方である。衣服を整えて祖先を慰め，豚を殺し，牯牛を供犠して，客人を接待する，それが皆の喜びであり生きがいにもなる。

祭祀の責任者は「牯牛頭」（祭鼓師）で，寨でも最も古く定住した草分け筋の家族成員の中から，威信と影響力がある者を，村の有力者が集まって選ぶ。牯牛頭は祭祀の組織者かつ指揮者で，この世（陽間）の人々の指揮をとるだけでなく，あの世（陰間）の鬼神との交渉も行う。副手については第二番目にこの地に定住した家族成員の中から選ぶ。日程

については村落委員会と牯臓頭が卵を使う占い「看蛋」で決定する。牯臓頭は特定氏族から選ばれ，従来の慣習の遵守者を尊重するなど，伝承保持者の性格が強い。

4. 村の概要

小脳村での祭祀の経過について，以下に時間の経過を追って述べておこう。我々が小脳へ向かったのは1999年12月21日（己卯年，旧暦11月14日）である[5)]。黔南の三都水族自治県県城の三都から榕江へ向かう国道321号を東南に35キロで都江（標高360メートル）につく。土産に持参するオンドリ（公鶏）をもらう予定であったが，使いに出た者が午前8時頃に市が開かれる八開に行って戻ってこないのでしばらく待つ。結局は，八開の市まで迎えに行ってオンドリと一緒に連れてきた。都江から公道を外れて北に向かって15キロの地点の大岩堡という場所に午後3時に着く。ここからは徒歩で3キロほど下りぎみの道を歩き，段々畑や焼畑の跡や，出造り小屋を見て4時30分に小脳に到着した（図版1）。

小脳は都江鎮に属し，都江の町の東北面に立地する村で標高は785メートル，戸数は209，人口は約1300人の苗族の村である。東は榕江県興華郷に接する。村名のシャオナオ（小脳）とは，村内の自然村の名称，ラオウォン（dlaod vongk）が漢族にはソオノォンやソウナオと訛って伝えられたことに由来するらしいが，苗語の意味は「山嶺」，山の尾根である。この地域の苗族の自称はタムーという。村の主な姓は六つで，多い順では，何，鐘，雷，平，韋，白である。少数の姓には羅，王，楊，蕭，対，阿，李，呉，姚，堡，朱，周，莫，厳，黄，張などがいる。何姓が一番古く居住したとされる。何姓は近くの村の巫不や高堯などにも多く居住し，この地方の有力者である。祖先たちは東方から都柳江沿いに登って来て，綿花や小麦の栽培を試みる適地を探して歩いたが好い場所がなかった。この地に来て鋤で土を掘ると，七寸の黒土と三寸の黄土が出たので，好い土地だと考えて定住したという。

主な年中行事は春節（正月），清明節（家の中で祖先を祀る），五月五日（端午の節句），開秧門（出穂に際しての祈願），鬼節（七月半。家の中で祖先を祀る）である。現在の生業は水稲，陸稲，玉蜀黍（トウモロコシ），本薯（イモ），小麦，油菜（ナタネ），大豆，赤豆，粟，稗，高粱，蕎麦などを作り，川魚も食べる。水稲は清明節頃に種蒔き，五～六月田植え，十月に収穫である。かつては焼畑（刀耕火種）を行い，稗，綿花，蕎麦も作った。焼畑の連作終了後は杉を植えた。耕地面積は587ムー（田圃は537ムー）である。近

年，アンチモンが採掘されて現金収入があったが，現在では作業は中止され，経済水準は低いままである。電気も十分ではなく，この祭りに間に合わせるために，旧暦11月9日に引いたというが，電気料未払いで停止していたのを復活したのが真相だという[6]。一説では子供が送電線に触って感電死したので，祟りがあるとして電気を使わなくなったのだともいう。但し，今回の祭りの期間だけは確実に送電するとの確約は得た。一方，自家発電装置をもち，巨大な衛星放送アンテナを立てている家が村の中央部の西側にあり一部には富者がいる。

村は三つの自然村の安家沟，ピィティアン，ラオウォンからなる。大岩堡から下ってきた道沿いで南面する集落が安家沟である。解放前までは苗年（旧十月）に各家が総計10キロほど糯米を搗いて，この村の中央部にある杉の木に魚と共にお供えをした（現在は春節を祝うことに変化）。これに対して川を挟んで北面する山側の大きな集落は，背後の山であるウェンテュウメイ（vend diub meif），漢語で言う「馬背山」の尾根上に立地する自然村で，上部はピィティアン（bildiangb），下部はラオウォン（dlaod vongk）という。村人が集まり祭場になる跳月塘（盧笙坪）は前者，牛塘は後者の中に位置する。跳月塘は山上の広場で男女の公の交際場でもあるのに対して，牛塘は村中央の闘牛の祭場で周囲から見下ろせるように擂鉢状を呈している。総じて，集落は斜面の下，北から東に向けて回廊を作って建つ高床式住居が多く風が谷側から吹き上がるので冬は寒い。ピィティアンとラオウォンは，現在では六つの小組から構成されている。一組は川の近くの北面で平姓が多く，二組は一組の南面上部で鐘氏が多い。三組は二組の南面上部で何姓が多く，四組は二組の西面で平，韋，白姓が多い。五組は四組の南面で，平，韋姓が多く，六組は最南端の上部で雷姓が多い。牛塘（苗語：トゥィニュー deixnix）は一組，二組，四組の境が交わる場所，跳月塘（盧笙坪，苗語：カマニュー kamunix）は六組の西側で小学校は南西に隣接する。正面に三角形の美しい山，ロンポー（dlong bongk）を望む。

北側の大きな集落，ピィティアンとラオウォンは北面ないし東北に面し，川の源流地帯の山嶺を右（東側）に，大きな深い谷を左（西側）に望む。太陽は右手の山嶺から昇り，左手の谷間に沈んで，夕日が村を照らし出す。闇が広がると月が右手から昇ってくる。村の東側にある牛塘は，牯臓節の大祭の時に祖先を迎えて交流する祖先祭祀の祭場になり，男性が全体を取り仕切る。かつては亥年に闘牛もここで行っていたという。これに対して村の西側にある跳月塘は，盧笙に合わせて女性が舞い遊ぶ場所で男女の社交場にもなる。村全体では，東が男，西が女という構図があるのかもしれない。一方，背後にある「馬背山」の山奥には埋葬地があり，この尾根は祖先が下ってきた古い道であるという。山の尾

根筋の上部地域に古い家筋，下部地域に新しい家筋が住み着いているから，村の立地は祖先がやってきた記憶の中の歴史を，空間上に投影しているのかもしれない。

三組と四組の境に大岩があり村の中心の臍にあたる。ここは物事を決める場所，いわゆる苗族の「埋岩会議」の主催地で，大きな岩を神聖視し，その照覧のもとに大事なことを決めて遵守する誓約をした。大岩の上部には神樹のオウダン（ox　dangx）が生えていて聖地の雰囲気がある。三組に草分け筋の何姓が住む。元々は三家族が住み着いて広まったという草分けの家である。鐘姓の多い二組と，雷姓の多い六組はこれに次いで古いと見られる。現在でも祖先祭祀の主役は何姓で，鐘姓と雷姓がこれに加わり，平姓と韋姓はこれに次ぐ形をとる。二組に住む鐘姓の人には水牛を殺す時に鉄砲で三回打つという役割がある。

5. 村の組織と現状

村長は雷忠美（45歳）が務め，伝統習俗を継承すると共に村をまとめる役割を担う。昔は人望のある寨老が選ばれて務めたが，現在では村長は自由選挙で選ばれて三年の任期であり，現村長は1998年3月から担当している。村民委員会が最高の意思決定機関で五人から構成される（村長，副村長二，文書，会計からなる）。村の幹部で村長に次ぐ実力者は，中国共産党支部書紀の平忠永（50歳）である。ちなみに共産党員は約十戸だという。村長に次ぐ実力者は，「牯臓頭」（牯葬頭）を務める何老忙（60歳），村の行政秘書を務める韋金貴（30歳），村治保主任で治安維持にあたる鐘永光（46歳）の三人で，村落委員会の中核を担う。牯臓頭は草分け筋の何姓から出て，現在は五代目だといい慣行が持続している。今回の準備は委員会で責任分担を決めて，それぞれ四～五人ずつ担当した。当日の貼り出しには，「1，会場安排布置　2，大岩堡接待站　3，来賓及領袖住宿安排及厠所整理　4，負債安排生活及炊具準備　5，迎賓門及木納衛生田　6，都江街上飲食衛生及服務，旅社的服務及衛生工作　7，安排苗族婦女敬酒　8，迎接隊　9，安全保衛工作　10，放礼炮　11，小脳村簡介　12，十三日前全部準備献猪」とあり，各担当者を明記して12月20日付け「都江鎮小脳村牯葬節　簿略領袖小組」名義で公表された。

今回，我々が滞在した家は母子家庭で，母親の何老最（45歳）と子供たちが住んでいた。夫は平忠入といい1997年に死亡した（当時48歳）。アンチモン採掘の利権争いに巻き込まれ，三都からきた商人に突然ピストルで撃たれたのだという。犯人はその場で逮捕され収監されて裁判にかけられたが，最終的には殺人事件は示談で解決することになり，

賠償金を妻がもらうことでけりがついた。しかし，支払いは滞りがちで未だに全額を受け取ってはいない。滞在していた住居は1996年の新築で大きな造りをなし，鉱山開発で利益を得て作った。住居を造る費用は3000から5000元であり，都江で道路造りをしても収入は一日10元程度（食事は別）なので大きな富を急に蓄えたことがわかる。アンチモンの採掘は92年に始まって96年には終了し，実質的には94年と95年の二年間が最盛期であったという。公道が近くまで引かれたのもこのためであった。村の経済状態は採掘に伴って94年から急速に良くなり電気も通った。テレビの衛星放送アンテナを備える家の出現は95年である。この時期に多くの外部者が訪れて様々な問題を引き起こしたらしい。

この家では，夫亡き後，女手だけで沢山の子供達を養うことは容易ではない。子供は，平立秋（25歳，女），平立溜（22歳，女），平立涼（18歳，男），平立菊（15歳，女），平立華（12歳，男），平立貳（2歳，男）で，長女の平立秋は嫁にいった。平立溜は学校へは行かず，平立涼は中学二年まで，平立菊は小学校三年まで通った。小学校は義務教育であるがうまく機能しているとは言えない。村内に一つある小学校の学生は1997年には160人であったが，1999年には60人になった。現在，女子は二人しかいない。これは親が女子に対しては自分の家の仕事をやればよいと言って，学校に来させないからだという。費用は一年間で60元ほどだが，現金収入の少ない村人には大きな負担である。教師の給料は公辨は400元で一人，民辨は150元で三人ほどいて教育にあたっている。中学校は都江まで行って寄宿生活をおくるので，生活費はかさみ半年で300元は必要であるから，通う人は限られてくる。なお，小学校の学生数の急激な減少はアンチモンの採掘が終了したので人口が流出したことによるらしい。

村の一日は，女性たちの早朝の水汲みと，家内での火起こしに始まる（図版2，図版3）。日中になると，女性は村の下手の川に降りて，砧を上手に使って洗濯物を石に叩きつけて洗濯したり，白菜や大根などの野菜を洗ったりする。水汲み，薪割り，洗濯，裁縫，染色は女性の仕事である。家畜の飼料用の茅草が水に浸され，河辺には水車があって稲をはじめとする穀物の脱穀に使われる。アヒルたちは人間の有無にかかわらず河原を彷徨っている。村の中で目立つのは，家の前面に織機を出して衣装の刺繍に余念が無い女性の姿である（図版4）。祭祖衣の文様はムカデと鶏，龍や花を描く（図版5）。男性用の衣服は茶色の光沢つきの布で，17種の色の原料と卵の白身を塗り，盛装時には紺色の刺繍布を肩に掛ける（図版6）。男は山に伐採など山仕事で出かけて一日中帰って来ない。周囲の山々は鬱蒼たる森であったが，1958年から60年にかけての大躍進の時代に製鉄燃料として膨大な木を切ったので禿山となったという。夕暮れには沢山の人が伐採や耕作を終えて山か

らおりて来る。背後の山から子供たちが放牧していた牛を連れ帰る。稲藁を背負って下ってくる子供，薪や飼料の草を天秤で担いだ女性たちが降りてくる。夕暮れ時は，女性が再び井戸へ水汲みにいき炊事をする時間でもある。夕餉の煙が各家の屋根から湯気のように立ち上る頃に，濃い闇が迫ってくる。夜がふける前に女性たちは再度，井戸に水汲みに行く。月光の下，シャンシャンと銀の飾りの音をさせながら田圃のあぜを歩く女性たち，その背後に点々と明りがつく村々がぼんやりと広がり，どこからともなく盧笙の音色が響いてくる。

6. 牯臓節の経過

(1) 起鼓と請祖霊。12月22日（冬月15日，未日）

22日の明け方に「起鼓」を行う。牯臓頭が家内の火塘に供物を置いて，その前に長い木鼓を据えて祈念した後に，鼓を叩いて祖先の霊を呼び起こすのが昔風のやり方である。しかし，ここ何十年，牯臓頭は木鼓を用いず，大きな銅鑼を使用する。木鼓も銅鼓もなくなったので[7]，銅鑼が代用され，村の幹部が「牯臓頭」（祭鼓師）の家に集まり銅鑼を打ち鳴らすだけになっている。

22日の午前中には，各家々で祖先を招く祭祀「請祖霊」，苗語ではケーペンノン（各碰弄）を行う。牯臓牛を殺す家では必ず行うことになっている。平小選宅で見学する。火塘の脇の柱の前に，米飯を盛り付けた碗を置き干魚を添えて前に三皿出し，藁を敷いてその上に女性が着る衣服（スカートと脚半）と靴，牛角，樹木の枝（楠木），麻糸を供える。米飯は豊作祈願，魚は子沢山を意味し，女性の衣服は遠い祖先は女性であったことを表すという。魚は川漁，麻糸は採集という先祖の仕事を意味し，麻糸は先祖の長い旅路を表すともいう（図版7）。祈願は鬼師，苗語でカオ・シャンが担当し，ここでは平光林（49歳）が行った[8]。村にはこうした役目をする人が十人ほどいるという。祖先の由来や牯臓節の趣旨を述べ，祖先の霊を招いて，五穀豊穣や除災招福を祈願する。家内の中心の柱にも供物を置く。ここには家族の守護神として長寿と生命を守る竹（花樹，jenlnzek，jenl hold）が祀られている。韋姓の家の場合には，堂屋の中央の囲炉裏（火塘）の一角に清めた木の板を敷いて，その上に祭品として，女性が着る衣服，花柄の靴（刺繍入り花鞋），銀手金蜀（手首に巻く銀飾り），銀項圈（首に巻く銀飾り），布疋，糯飯一碗，米酒三杯，緑葉付きの小樹枝を置く。60歳の韋の家長が傍らに坐って，苗語で「今年は好い年，今月は好い月，今日は吉日，龍蛇を避けて，祖霊が来るように。祖霊が来れば，必ず牯牛を

送ります。牛は好い旋毛を持っています。・・・祖霊よ我々を守って下さい。我々を守護し，五穀豊作，衣服も豊かで，食も足りて，家畜もよく育つようにお願いします」と念じる。女性の使用する品々を祖先に捧げるのは，女性の祖先の霊魂を招くからだという。

この日は客人をもてなすための豚を殺す日であり，殺しは男性の役割で，村全体が豚の悲鳴に満ちる。各家で豚を殺すが，呪語と祝詞を念じてから後に執行する（図版8)。牯臓牛のある家は三回鉄砲を放ってから豚を殺し，牯臓牛を出さない家が豚を殺す場合は鉄砲を一回放ってから打つ慣行であったという。この規則は現在は厳格には守られていない。

(2) 客人迎え。12月23日（冬月16日，申日)。

早朝の午前2時から3時頃に，牯臓頭と何姓の人々で十人位が組になって牯臓牛を殺す予定の家々を盧笙を吹きながら回り，水牛の前で銅鑼を叩き，祭りの開始を告げるとともに祖先に祈念する。盧笙隊は各家々を暗いうちから夜明けにかけて廻る[9)]。

午前中は準備の続きで女性は野菜を洗い，男性も豚の料理の準備をする。午後3時から4時頃に客人が来始めて夜の12時まで絶えることなくやってくる。村に入る前にはお酒を飲まされる。客人のうち，特に，母方オジの来訪は丁寧に扱われる。客人はみやげ物（礼品）を必ず持参し，農民は黄金色に稔った糯米を天秤に担いで肩に乗せてやってくる（図版9)。大体一人5キロの米を持参するが，30～100キロ（15斤から50斤）に達する人もいる。酒も一樽，鶏を一羽などを天秤棒にくくり付けてくる。鶏はオンドリ（公鶏）で，酒は5キロから最高で50キロ，合わせてお祝いのお金の「紅包」として銭を20元，30元，50元，町から来る人は100～200元を持参し，更に爆竹を抱え，家に入る前には必ずけたたましく鳴らす。

23日の午後4時から4時20分頃にかけて，跳月塘の脇で特別に水牛を供犠した。木を二本，V字形に組み水牛の首をこの上に置くように誘導し，上から木の棒で押さえつけ，脳天に斧を打ち下ろす。殺害し終わると舌に竹を串刺しにして餅を刺す。あの世へ行ったならば，この世のことは何も話さないという意味である。頚動脈を切って血を器に受け人々は相伴に預かる。24日に来る特別の招待客に出すご馳走用として供犠されたものである。

この日の夜から男女の対歌（歌掛け）が始まり，祭りの終了まで毎晩のように行われる。

(3) 大型祭幡遊塘と盧笙舞。12月24日（冬月17日，酉日)。

この日に祭りは正式に開幕する。各家では鶏が鳴き始める前，午前3時頃に起きて食事

の用意をして，8時前に食事をして一日に備える。24日から26日までの三日間は朝早く起きる日が続く。早朝から都江鎮を初めとして各地から親類や友達が客人として次々にやってくる。遠くから長い山道をたどってくるものも多い。客人が村の正面の門から入るときには，必ず牛角に入れた酒を飲まされる。寨には五～六ケ所の出入り口があるが，朝早くから深夜に至るまで来賓は絶えずやってきて，爆竹の音が寨の各所で大きく響く。熱烈祝賀の意味である。隣村からは一戸につき一人は必ずやってくるという。主人は火鍋を掛けて酒肉で歓待する。韋忠永の話では，夜には客人が千人以上やってきて，村内の人口をはるかに上回ってしまうという。少人数しか収容できない家は，床上にしとねをつくったり，囲炉裏の脇に寝たり，倉庫の中で稲草の上に寝たりする。人々は語らいをして，寒い冬の晩を喜び笑い遅くまで騒ぐ。客人のうち最も尊敬されるのは，母方の親族（姑や舅）である。また，男性は「結拝兄弟」や「老根」という義兄弟の関係を作っている者同士の交流が大事である。気に入ったもの同士は上着を交換して義兄弟となり友好関係を結んでおり，祭りの交流の主役でもある。客人の出身の村は，巫不，高排，都江，高堯，四格，有路，有哀，橋垃，榕江，控堂，控抗，覚車，烏早，擺机，烏嗄，壩街，興華，擺烏，亥得，柳盤，平甲，打魚，三都，排怪，介頼，羊福などで，特に定期市が開かれて人口も多い巫不，都江，壩街，羊福，興華，打魚，榕江の客人が多い。県単位では三都，榕江，従江，荔波，雷山，丹寨に広がっている。周囲50キロ位の所から歩いてくる者もいる。

昼過ぎには，省・州・県・鎮などの政府や行政部門の代表がやって来る。黔南州政治協商会議主席の潘希武，黔南人民政府副主席の楊再倫，三都県県長，都江鎮鎮長などが含まれていた。大岩堡からくる道脇の「大青杉」の傍らに，「松柏樹枝」で迎賓門を作る。韋老平が青年の盧笙手を率いて脇に立ち，盛装した苗族の娘は手に牛角杯を持つ。男性たちは茶色の上着の上に青色で細かく刺繍をした布をまとい盛装で整列する。男性は盧笙を吹奏して来賓を迎え（図版10），女性は強い酒が入った牛角杯で「欄門酒」を接待する（図版11）。酒の多少に拘らず，門を越えて寨に入る者は接待にあずかる。客人への尊敬の意を籠めているので拒めば罰を受ける。牛角杯の酒は全て飲み干すのが規則である。和やかな気持ちで村に入る。

牛塘では午後1時過ぎから来賓の挨拶があり，政府・行政関係者の熱弁が大半である。しばらくすると場外は人の波に溢れ，周囲の吊脚楼（高床式住居）の走廊や，樹木の上などに男女，老少を問わず群がる。近くの村に住んでいる水族（スイ）や侗族（トン）などもやってきて見物する。爆竹が鳴り，「大型祭幡遊塘」が始まる。何，鍾，平，雷，白などの各姓氏の家族が，綺麗に作った大傘の「祭祖方傘」を彩色した「祭幡」，苗語で言うとシーヤオ（昔

耀）で飾り，村内の各所で盧笙に合わせて舞いつつ，牛塘にやってくる（図版12）。

隊伍の配列には順番がある。①先頭は牯臓頭の副手（何氏の一族）で，酒が入った牛角杯を持ち，口に酒を含んで地面に吹く。開路の意味があり，悪鬼を駆逐する。②牯臓頭（何老忙）が銅鑼を叩いて道を開く。③三人の男性が鮮やかな刺繍をほどこし羽毛裾をつけた「祭祖衣」（牯臓衣。男女とも同じ）をまとい，頭に黒い刺繍の布をまき，盧笙を吹いて現れる（図版13）。盛装した男性は何姓の最初に来た三組の家の先祖を表す。④青年が四人出て筒型の盧笙（莽筒）を吹く。中青年組が盧笙隊の中核を編成し，小さな子供たちがこれに続く。⑤三人の男性が三種類の大傘「祭祖方傘」の「祭幡」を被り，中で竹竿を持って歩む（図版14～16）。何姓の場合，三本の傘の上の「祭幡」はムカデと龍で，女性が頭につける銀の角飾りがつく。「祭幡」には赤い花飾り，白い鳥毛，青色の刺繍布などの装飾をつけるものもある。⑥各氏族の中で最も強壮で剽悍な牯水牛が現れ，男性たちが前に三人，後ろに二人つく（図版17）。水牛を引く若者は紺色の刺繍の布をまとい首に女性用の銀飾りをかける者もいる。これは女性の祖先を追悼する意味だという。

水牛は一族を代表するものであると共に祖先への捧げ物であり，殺されることであの世へと旅立ち，他界でも祖先に仕えて耕作に励むと信じられている。観客が近寄っては布を掛けていく。爆竹が鳴り響き，隊伍は場を三度廻る。花帯を腰につけて，独特の花格頭の被り物をかぶった子供達の姿も見える。最後に頭上に銀飾りをつけた女性が祭祖衣を身につけて現れ，手を胸の前にあてて上下に動かしつつ静かに足踏みをして舞う（図版18）。

何姓の集団の後に鐘姓が同様の形式で続く。順番は，何，鐘，雷，平，韋で各姓ごとに牛塘に現れて場内を回るが，主体は何，鐘，雷の三姓である。それぞれの責任者は何老忙，鐘明朝，雷忠美，平老公，韋老干が務める。傘の装飾は変化に富むが，刺繍された織物で飾られて，特に花柄が美しい。上部につける装飾は，三日月の銀飾りと鶏と羽毛を組み合わせたもの，銀の角飾りに花飾りをしたものが目立ち，女性がつける装飾具である。これは究極の祖先が女性であること，女性の始祖を意味している。最後に全ての姓の集団が一緒になって牛塘を回って17時30分に終了した。この行列を表す唱え言がある。それは「チュー・ラ・ニュー・シッテ jex laib niel xitderk，ニァン・ラ・ニュー・トッコゥ ni-angb laib niel det guk」である。トッコゥは竹の傘（帽子の意味もある），ニューは鼓，ラは箇，を意味する。「九つの鼓は皆それぞれに似ている。鼓の形の竹の傘が幾つもある」という意味である。傘はそれを被ってやってきた九人の先祖を表し（九の数字は苗族にとって沢山という意味でもある），祖先の霊魂の拠り所の木鼓と同じと見なされている。本来は，木鼓を作って叩くことで祖先の霊が呼び出されるが，現在は木鼓を所有していな

い。しかし，竹で作った傘は木鼓と同じ役割を果たして，樹木から呼び覚まされた祖先の霊が宿る場所である。傘そのものが現世に姿を現した祖先，仮装した祖先とも見なし得る。言い換えれば，来訪する神霊のようでもある。傘は女性の衣装と装飾品を被せて女性の祖先を表し，色鮮やかな幡で装飾される。傘の上にある三日月の銀飾りは女性の頭飾りで，水牛の角と同時に龍を表す。鳥を載せている傘もあり，鳥の羽毛が周囲を縁取る。先祖を霊界へ導くのが鳥であり，水牛と鳥は共に苗族にとってあの世との交流に欠かせない。また，幡にも龍や花の刺繍がつき，付き添う人々の纏う祭祖衣には，龍やムカデが描かれ，神話世界を身に纏うとも言える[10]。水牛の引き回しは集まってきた祖先の霊魂に捧げて見せる意味があるという。そして，祖先の霊は村にしばらく止まって人々と交流し，他界に戻る時に水牛が供犠されて，一緒に霊界に連れ帰るのだとされる。

牛塘での行事が終了した後，政府関係者や苗族学会など外部からの招待客は跳月塘にある小学校での食事に招かれる。夕暮れが迫る頃，跳月塘（盧笙坪。小学校前の広場）で盧笙舞が始まる。祭場用の盧笙（苗語はキー）が用意され，男性が先頭にたって吹き鳴らし，頭上に銀飾りをつけてきらびやかに盛装した娘たちがゆったりと単調な所作で左回りに舞う。これは鳥衣でもあり衣装の裾の白鳥の羽毛がひらめく。夜10時を過ぎて月が上る頃，盧笙舞は一層にぎやかさを増して，祭場一杯を女性たちが埋め尽くす。首には輪状の「銀項圏」を掛けて，腕には金銀の飾り「銀手金蜀」を着け，腰には方形の刺繍の下げ物の「団腰」，足の裏側には銀鈴を帯びる。さわやかな金属音が闇の中に響いて，舞は軽やかにゆっくりと進退を繰り返しながら祭場を旋回する。女性たちは双方の臂を曲げて，肘を胸前にあわせ，手指を微妙に伸ばし，胸や腹を上下に動かす。銀がきらきらと月明りで輝く。一方，牛塘には少数の舞手が残り，「古瓢舞」を舞い始める。青年たちが茶色の衣や「青蘭布衣」を身にまとい，馬の尻尾毛を弦とした木琴の「古瓢琴」をかきならしながら舞う（図版19）。この楽器は苗語ではクーハーワー（古哈凹）といい，「泡桐木」を材料にし，牛の筋を張り，瓢箪に似せた形をしている。侗族の牛腿琴を取り込んだらしい。見物人は老人や幼児が多い。華やかな女性が舞う跳月塘に対して，牛塘では男性が遊び風に舞い対照的な雰囲気を醸し出す。この日は夜遅くまで若い男女が楽しむ。舞に飽きると気のあったもの同士が，特定の家の火塘（囲炉裏）に集まって歌を掛け合う光景も見られる。

(4) 盧笙舞。12月25日（冬月18日，戌日）。

昼間は盧笙舞が跳月塘で繰り広げられる。午後1時過ぎから六人の男性の盧笙に合わせて女性達の舞が始まり夕暮れまで盧笙舞が続く（図版20）。若い男女の社交の日である。

(5) 牛転塘。12月26日（冬月19日，亥日）。

午後に牛塘では祖先を敬って祭品として捧げる水牛を引き回す儀礼がある。苗語でトゥイニタートゥイ（兌尼打兌），漢語では「牛転塘」（牽牛踩塘）という。牯臓牛が家の牛小屋から着飾って次々に引き出され牛塘へと向かう（図版21）。到着すると，紺色の刺繍の布をまとい茶色の服を着た家長が苗語でニーテター（擬徳塔）と叫ぶ。苗語で「転塘」の意味のリャンニュウ（亮牛）ともいう。牯臓牛は刺繍や毛毯などをまとい，角に銀飾をつけ，頭に大きな紅の彩緞をかけて，堂々と威風を誇る（図版22）。紅布は慶事や吉祥を表すと共に祖先の糧食や財富を送ることを意味する。鉄砲と爆竹，喧声などに興奮して少し暴れたり跳んだりするが次第におさまる。牛は母方オジ（舅舅）やオバ（姑婆），家長の子供たちなど5～6人ほどに牽引され，時には角を押して誘導される。尻尾を掴んで牛が地面にへたり込んで臀部を地に付けないようにする。牯臓牛は場内を三回まわるが，途中で主人が地上の泥土を掴み牛の背の上にのせる。「土生金」といい，路銀の意味で，あの世の祖先の霊に会いに行く途中で必要な銀両にするという[11]。牛を和ませ愛情をもってやさしく接すると，三回まわるうちに次第に温和になる。土地の老人はこれは祖先の霊が照応するためだという。

牛は普段から家畜たちのうちでも最も大切にされており，飼育と取り扱いには細心の注意を払う。黄牛は別として，母水牛や牯水牛の保護は重要で，牯臓牛はいつも安全なように住房の内でも三間あるうちの左か右の部屋につないで監視を怠らない。たとえ自分の所有する耕田が少なくとも牛のためには食糧を確保し，冬には青草のある所ならばどんなに遠くの山里であっても連れて行って草をはませるように心掛ける。穀物や草を大量に保存しておくが，飼料の草は新鮮に保つために，河辺の浅い水のところにつけておく。食糧には糠や麩を加え牯臓節が終了するまでは米飯を食べさせる。牯臓牛は肥えて壮健な体となり，重量も400から500斤になる。数年，或いは十数年を誠心誠意で育てるので，主人と自己が養った牛の間には深い情感の繋がりが生まれる。その究極の時に牯臓牛をあの世に送ることになる。主人は勿論のこと，家族の全てが惜別の情を催すという。今回も雷老仰と韋再文の両家は牛をなかなか外に連れだそうとせずに，家族と一緒に記念写真をとった。

夜になると，各家では外の村々から来た親族や友人との交歓で盛り上がり，主婦は食事造りや接待で多忙をきわめる。友人たちの中には一旦，自分の村に戻って出直してきたものもいる。祖先祭祀で行うべき事について，老人に確認して，不足を補うのもこの時である。夜がふけて月が上ると，牛塘に若者が集まってきて，いつのまにか琴のクーハーワー（古哈凹）をかなで始める。低い音色に誘われるようにして着飾った娘たちが現れて古瓢

舞を舞う。若者たちの社交と交流の日々が続く。

(6) 木を伐る。12月27日（冬月20日，子日）。

牯臓牛を持つ家では殺牛の準備を進め，水牛を殺す特別の台になる三本の木を山に取りに行く。男性の役割で朝早くに家を出て，一日掛かりで奥山の森に行って木を切ってくる。家々にやってきた親族や友人の男性が手伝うこともある。樹木は祖先の霊が宿るという神聖な楓樹を選定するが，姿のよいものを求めてあちこち尋ね歩く。村からかなり遠い所の山上に生えているものを三本選ぶのが通例で，樹木を切る前には祭事の目的を述べて祈念する。森には先祖の霊だけでなく，神霊，悪霊，死霊など様々な霊がいると信じられている。森は生活の根源であると共に，あの世との境界地でもある。楓樹は苗語では一般にはトンチとかトマン（dod　mangx）と呼ばれている。殺牛用の三本の木は特別に，トェマン det mangx，トェファ det fab，トェチュウ det jex（音を漢語の音で表記すると，図芒，図花，図九，或は道芒，道花，道九）という。三本が組になり一本は葉付きである。山奥深くの樹木を切って里に降ろしてくることは，祖先の霊魂が宿る特別な木を持ち帰り，それに託して水牛の霊魂もあの世に送るという意味がある。伐採した木を使って，祖先伝来の決まりにのっとって，ティ（dix，抵）という台を設ける（図版23)。二本の木を交差させてその上に掛け渡すように更に一本を置いておく。全体の姿は口の開いた剃刀の歯に喩えられる。ティの切断した口は西に据えて葉付きを東向きにする。東方は太陽の昇る方位で，祖先の霊が帰還する故郷の地であることが意識されている。出来上がると，ティの後に立って呪語を唱える。外の人が触れることのないように注意し，主人は昼夜これを守り，粗忽なことがないようにする。この禁忌を犯せば災難に会うという。

夜は跳月塘で盧笙舞が行われる。この日，戸口の前に刀と牛角を置いて，鶏，酒，糯米，干魚を供え，土地神に守護を願う家もある。牛角は前回の牯臓節の時に供犠した水牛のもので，一家の豊かさを表す。亥日，子日，丑日の三日間は祖先の霊魂が村中に迎え入れられるが，未婚で亡くなった者の霊魂である鬼がやってきて，未婚者にとりつくともいう。そこでウォパイ（vobbal，窩辮）という植物で身体の邪を祓いのける。未婚者の霊魂はしっかりお祓いをしないと牛小屋に住み着いてしまうという。

(7) 転牛塘と殺牛の準備。12月28日（冬月21日，丑日)。

早朝の七時頃から各戸より水牛を牛塘で引き回す「転牛塘」がある。自分の働いた場所をもう一度見せるという意味があるという。爆竹が大きな音をたてる中，場内を三周する。

角には赤い布を掛けて祝福したり，銀飾りや祭祖衣を着せて，背中に泥を塗りつける。この日，再び客人が稲を背負い，薪を持ち，衣類を担いで，野を越え山を越えて歩いてくる。

冬天の夜の晩に寒風が吹く。家々の戸や門前や路傍にティがたち，上には小樹枝が置かれる。その傍らには火が焚かれ稲藁が備えられ，坐ったりして黙々と待ち，時間の到来を厳格に待つ。門口のところにつなぎ，低く言葉を唱える。最初に囲炉裏で祝詞を唱え，次いで牛の前で同じ詞を唱える。「牛よ，ああ牛よ。古き友よ。古き祖先のために帰りなさい。祖先の霊の労働に尽くしなさい。祖先の霊たちよ，人間たちを守護し，平安に，そして長い旅を」という。

(8) 12 月 29 日（冬月 22 日，寅日）。殺牛祭祖。

午前零時を過ぎて寅日に変わると，各家では囲炉裏の前に，酒，御飯，麻糸，干魚など供物を供える。オンドリ（公鶏）を撲殺して供える家もある。その前で主人が「牛よ，祖先たちの住むところへ行き，田を耕すように。祖先の方々，これから牛を送ります。我々を守護し，家畜を保護して，子孫を栄えさせて下さい」と祈りを捧げる。寅日の丑時の頃，午前一時か二時を過ぎて鶏が三回鳴くと，牛殺しの責任者（領頭人）である鐘氏が，「ポン，ポン，ポン」と三発の鉄砲を撃つ。夜の静けさが破られ，牯臓頭の号令が下ると村人はすぐに行動を起こして殺牛の用意をする。苗語では殺牛をタンニ（覚擬）といい，漢語の土語では「敲牛」といって，「敲」kao を使い，通常使用する「砍」や「刺」を使わない。殺害するというよりも，特別な想いを込めて送り出すという意識がある。牯臓牛を持つ家では，家長が指揮をとり，母方のオジや義兄弟（老根）などが協力して水牛を押してティの上に据える。水牛は極めて従順になり，家族の中には長い間育てあげた日々を想い起こして涙をこぼすものもいる。牛を殺すのは母方オジ（舅舅），苗語でいうタンナイ（daibnenl）の役目である。手伝いの者が横棒で水牛を上から押さえつけて動かないようにする間に，母方オジが斧を勇壮に振り上げて牛の両方の角の間の脳天めがけて打ち下ろす（図版 24，25）。脳天から噴出した血漿を上半身に浴びることは吉祥を意味し，自己の福の気を増大するという。水牛は声を発せずに倒れかかる。斧を四～五回打ち付けて殺すのが好ましく，牛が泣き声を立てると不吉という。実際には木の棒で抑えつけられているので声は立てられない。流れ出る血を容器に受ける。牛の舌を引っ張り出して竹の棒を舌に突き刺す。これは牛があの世（陰間）に至るまでおしゃべりをしないようにするためであるという。水牛は時々この世の生きている人にとっては好ましくないことを祖先の霊に伝えるかもしれないと信じられている。最後に，水牛をティから外すが，その時に東側に

頭がくるように倒れれば吉と判断する。祖先は東方に帰ると信じているからである。寅日に祖先を送るのは，寅や卯が方位では東方にあたるからであるという。信仰熱心な家では，鬼師を招いて無事に水牛の霊魂があの世に行くように祈願してもらう場合もある。牛が他界で住む場所はノンエイマンチ（能野亡弃），ウンナィウンオゥ（吻乃紊窩）という。殺牛の作法は祖先の古い殺し方で，刀を使わず斧を使用して，圧死の手法も併用される。

今回は全村落で50数頭を殺したという。各家での殺牛の動作は整然と行われ，午前2時30分から3時までの間に全て終了した。この間，牛が叫ぶ声を聞くことは無い。水牛の黙死は吉祥を意味する。村が団結して，殺中，つまりタンニ（覚擬）は巧みに行われる。

水牛は夜が明けるまでに解体し（図版26），朝の食事には牛肉の鍋が用意されて，親族や友人を招いてともに食事をする。牛の臓物はまず祖先に捧げる。心臓，肺臓，胃，肝臓，腸である。四足のうち後足はお土産としてとっておき，重要な客人が帰る時に手渡す（重さは10キロから20キロ分）。一般的には，後足は母方オジにあげることになっており，オジに弟がいれば更に一本あげる。母方オジとオバには何でも多めに分ける。心臓は牛を殺した人に配ることが原則でこれも母方オジに渡ることが多い。母方オジが重視されるのは，結婚に際して自己の妻の兄弟の息子が自分の娘と一緒になる（母方交差オトコ婚）のが望ましいとされているからであると説明を受けた。もし，他の男性と結婚することになると，その息子の了解が必要になり，賠償金にあたる贈り物をあげて了解してもらう。後足は賓客のお土産であるが，前足は家族が食べる決まりで，特に主人は食べることが義務に近い。内臓は家族の取り分であり飽食する。この状況を漢族がみて，漢語で「吃牯臓」と名づけたのである。皮毛と肋骨も来賓に分ける。自己との血縁関係や親密度に応じて分ける量の多い少ないを決定する。一般には肋骨と肉を四・五斤分ずつ分け与える。余った肉は村内の友人を訪ねるときに持っていき，分けて食べる。肉の食事はおおよそ半月間は持続する。

水牛の肉の分配は慣行に従うが，今回は少し異なることもあった。寅日に先立って24日に特別に水牛を殺した後の分配では，通常は母方オジの取り分である後足が，三都県の県長と都江鎮の鎮長に与えられた。人民政府が母方オジの代わりを務めたわけで，現代では行政機関が血縁者に取って代わって保護者の役割を果たしていることを表しているのかもしれない。

この日の午後から客人は水牛の足などを持って帰り始める。

(9) 12月30日（冬月23日，卯日）。送客と封寨。

親族や友人など客人を送る日で，親戚まわりをして別れを惜しむ。水牛の後足や毛皮，豚肉などをお土産に持って帰る（図版27）。正午過ぎには大多数が出発し，我々も村落を離れた。牯臓節が終了すると「封寨」が行われる。祖先を送って寨を封じて鬼を駆逐するのであり，古い規約では殺牛が終わると，その後の三日三晩，寅日・卯日・辰日の三日を封寨と称して村を閉じた。一説では龍蛇を忌むので辰日まで寨（村落）を封じるとも言う。現在は改革されて三日は三時（とき）となり，酉の刻から亥の刻までの実質六時間である。

伝統的なやり方では，辰日（12月31日，冬月24日）の午後の酉の刻になると，牯臓頭は村の中の最も高い地点に立って，大声でホティティアン（佛丟添），つまり「寨を封ぜよ」という号令を発する。牯臓節の関係者で村落の責任者たちは主な井戸や村から出て行く路上に集まり，命令に従い三種類の樹枝を用いて村を封じる作業に取り掛かる。村の内側と外側の境界にあたる地点で閉ざす。老人の説明では，牯臓節の期間は各種の鬼や霊魂が善悪混在してやってくる。鬼は祟りをなすので，これを防ぐために各戸では駆邪の呪言を念じ，悪いものが入ってこないようにする。あらゆる道はふさがれ，集落外の井戸の水汲みにも行かれなくなる。樹枝はトェチュウ（det　jex）という楓樹の木を使用して，×印に組み，上部に更に一本差し渡し，中央に薄の穂を立てる（図版28）。封寨の時，ある家で唱えられた駆鬼の呪詞は，「牯臓節が過ぎて熱気が醒めた。四方の鬼どもよ，速やかに立ち去れ。酒に溺れ酒に酔い，熱くなった寨を見たであろうから」というものであった。更に，封寨に合わせて村内の未婚者で18歳までの青年男女を寨の外に放逐し，一定の時間の期限つきで帰ってくることにする。現在では六時間，かつては三日間であった。未婚の青年男女は鬼や魔物に身をさらすことになる。村の外の山稜上や田園の小道に三々五々青年男女が集まり，或いは坐り，或いは歩き，大方は地面に腰を掛けて談笑し，感情を通いあわす（図版29）。苗語でこれをパイカ（擺科）という。つまり男女の自由恋愛の時間が設けられるのであり，これによって配偶者を見つける。悪霊が外から来ないようにする一方，現世の存続を願う世俗的な意図もある。これが封寨の意味である。

7. 牯臓節の現在

(1) 死者との交流

小脳で行なわれた牯臓節について幾つかの考察を試みたい。この祭りを苗語ではノゥン・ニュウという。食（ノゥン）と鼓（ニュウ）の二つの要素が中心主題である。第一の

「食」とは，家族・親族・友人たちと豚や牛の肉を食べて酒を酌み交わし，お互いの交流を通じて絆を深めあうことであり，普段は食べられない豊富な肉，特に水牛の肉を飽食することでかけがえない至福の時を過ごす。牯臓節の時期に村内を歩いていると大半の家では朝から晩まで大宴会が続いている。第二は「鼓」の音で呼び覚まされた祖先や死者の霊魂と交流し，祖先を和めたり偲んだりすることである。苗語のノゥン・ニュウを，漢語の意訳を「牯葬節」とするのも一理あると言える。かつては木鼓や銅鼓を叩いて死者の霊魂を呼び醒まし，山の彼方から村の中に呼び込んだ。現在は，霊魂を招き入れる役割は銅鑼に変わったが，山中の森から祖先の霊が宿る「楓樹」を取ってくることは祖先迎えの意識である。背後の森は祖先だけでなく様々な神霊や悪霊，そして野生の動物の住まいする所なので，供物を上げて慰撫してから伐採する。祖先は各家では囲炉裏に宿るとされ祭祀期間中は供物を欠かさない。位牌や墓はなく，「傘は鼓に似ている」と言われるように，牛塘に出現する「傘」が鼓と同様に祖先の霊魂の宿る所と観念される。女性の衣装や銀飾りをつけて現われる傘は，祖先が出現したかのように受け取られている。祖先を呼び戻して生者と交流し，最後には霊魂を無事に故地に送り届けたいとの原郷回帰の願いが籠められる。囲炉裏での供物には，祖先を偲ぶ品々があげられるが，麻糸は魚網の材料で，魚は先祖が東方の海の浜辺で漁をしていたことを表すとされ，東方の故地が意識されている。祖先の内容は複雑で，ここ12年間に亡くなった身近な死者，記憶は薄れたが系譜をたどれる血縁者たち，そしてはるか昔の女性の祖先も含まれ，亡霊たちも合わせてやってくる。小脳の牯臓節は女性の始祖を祀るニュウ・ヨンイェでもある。遠い始祖や祖先には畏敬の念，近年の死者には懐かしさと畏怖，亡霊や死霊には恐怖の気持ちが混じり合っている。

水牛は祖先との意志の疎通を図るために殺される。水牛を殺害する専用台，ティは祖先の霊魂が宿るという「楓樹」で作られ，村の背後の山中の森から取ってくる。苗族の祖先は楓樹から生まれた蝶々の胡蝶媽媽であり，死後にその霊魂は樹木の中に帰ったとされるから[12]，楓樹を切って持ち帰ることは祖先の霊魂迎えである。水牛は「楓樹」に寄り掛かるようにして東方を向けて殺害され，崩れ落ちる時も東方が望ましいとされ，祖先の霊魂と共に水牛も祖先の故地に向かうと観念される。祖先を背後の森から村に迎え入れ，東方の故地に送るという意識もある。祖先は遥かな昔，東方から山河を越えて苦労して現在の地にたどり着いたのであり，牯臓節で村に迎えられた祖先の霊魂は，祭りの最後には古き昔にやってきた道を逆にたどって東方を目指す。祭祀の執行を卯年とし，殺牛を寅日に行うことは，祖先の故地が東方にあることに由来する。儀礼の焦点は霊魂の行方にあるが，その実在性を認める意識は若者の中では薄れつつあるようだ。

(2) 水牛

なぜ水牛が供犠の獣として選ばれるのであろうか。苗族の生業基盤が水稲にかなりの比重を置いていれば，オスの水牛は田圃を耕作する労働力として不可欠の家畜である。メスは生殖により再生産をもたらす資源として保存し，オスは貴重な肉資源となりうる。但し，肉牛としてよりも役牛の役割が大きく，メスよりもオスの方が他の物との交換財としての価値が高かった。水牛は人間と最も親しい関係にある究極の資源として，祖先祭祀では貴重な贈り物にもなる。乳利用がない地域では，動物の殺害に倫理性を問われたり出血についての禁忌意識はないという意見［谷 1997：135］に従えば，水牛の供犠が円滑に行なわれることも納得できよう。しかし，小脳の村人は水牛の殺害は胸が詰まる想いがするという。長年にわたって大切に家族同様に育て暮らしてきた水牛は自分の分身のようであり，その殺害は人々の心の中に空洞を作り感情の喪失感を生み出す。しかし，あえてその感情を祖先への追憶や思慕に向けて反転させる。水牛の供犠という暴力や破壊の行為が別の段階への移行を可能にし，あの世に水牛を送って祖先を喜ばせ，見返りとしてこの世での守護と子孫繁栄の願いを聞き届けてもらう。あの世はこの世と相似の世界であり，祖先にとって水牛は必需品と信じられている。水牛の牛角は殺害の後，家の中に大事に保存されて牯臓節の巨大な蕩尽の記憶を留め，家の富の証しや誇りともなる（図版 30)。

水牛の重要性は苗族の定住化が進んでから高まったと考えられる。その時期はいつ頃かは不明だが，伝承では祖先は東方から移動して，貴州と広西の境界に到達してから牯臓節を開始したといい，ある時期以降に水牛の重視や供犠の祭祀が始まったことを示唆する。佐竹靖彦は宋代の西南中国の非漢族は，漢族の南下に伴う漢化によって，焼畑（刀耕火種）から常畑へ，水田耕作への過渡期にあり，「牛犂耕の採用と梯田化の技術導入」が主要因となって，谷間の盆地の開発が始まったことを，史料から明らかにしている［佐竹 1968］。苗族もまた同じ道筋を辿ったと思われる。焼畑では一定地点で生活して地味が衰えると別の場所へ移動する生活を営んでいたが，灌漑による水稲耕作が進むと定住が確定し，水牛の飼育も重要性を増した。水稲の収穫は焼畑よりも多いので，水利資源に恵まれる所では棚田（梯田）灌漑の比重が高まり[13]，耕作用の水牛は貴重な財産になったと推定される。棚田の維持は手間が掛かるが，肥料を調節すれば半永久的に使用出来る。水牛の供犠の発生は社会の転換と関連しているのであろう。現在では政府の施策や圧力で焼畑は規制され，定住化が強制されて水牛は家畜の必需品である。牯臓節は歴史的変遷を経た焼畑水田複合の生業を基盤とする祭祀で，米と水牛を死と再生に結びつけたと言える。

日々の暮らしの中で大事に扱われる水牛は，生活の始原を語る神話世界の中でも重みを

もって語られている。古歌の『十二個蛋』(juf ob laib bod) では［貴州省少数民族古籍整理出版規画小組辨公室（編）1993：488－513］，宇宙の始まりに楓樹に宿る胡蝶媽媽が12の卵を産み，その中から人類の始祖の姜央と，雷公，龍，虎，水牛などが生まれ，兄弟姉妹の親しい間柄であったという。水牛は天地の始まりに人間と一緒にこの世に生を受け，祖先と同等とされる。女性が盛装した時に頭部に被る銀飾りは牛角をかたどる半月状を呈し，龍の形が刻まれることも多く，龍角は牛角であり，牛は龍であるともいう。台江県の施洞で行われる龍船節で船の舳先には水牛の角をかたどった龍頭をつける。龍は水牛と同様に原初から人間と親しい間柄であるだけでなく，水をもたらす神霊，水神とも観念され，苗族の守護神でもある。衣装の背中に描かれる龍はムカデ（百足，蜈蚣）でもあり，公鶏（オンドリ）や雷公に統率されるという［百田 1999：149－171］。龍は漢族の風水思想の影響を受けて大地の龍脈と混淆し地霊ともなる。そして，水牛は土地の豊穣をもたらすので大地の主の龍と同じ機能を持つ。牛と龍などの動物は，樹木や森や山と交流しあう生活実践から神話世界に至る連続性の中で，相互に重なり合う感情の媒体なのである。

(3) 周期性のリズム

「鼓」と「牛」を通じて現れてくる死生観の特徴として，13年目という長い周期性を経て，盛大な宴により劇的な再生を遂げることが挙げられよう。この地の苗族は埋葬地はあるが葬式は大規模には行わないし，墓を持たず毎年の墓参も行わない。漢族のように位牌や祖先棚を作らず，骨に対する関心もなく，祖先は家の中の火塘（囲炉裏）で祀られる。埋葬から長い移行の時間を置き，大きな周期を経て催される牯臓節では，音や衣装や木鼓，言葉など不可視の媒体で霊魂を招いて歓待し，無事に故地に送り届けて葬儀が成就する。霊魂の不安定さは消滅して，祟りや災厄を逃れることが出来ると信じられている。ここ12年の間に亡くなった者には「境界の時間」の通過を完了させる祭りでもある。

周期的な祭祀活動や，一年を単位としない長い周期には，移動を基本として暮らしてきた生活様式の反映があると思われる。苗族はかつては焼畑農業を主体に，狩猟や雑穀栽培を合わせ行い，移動性の高い流動的な社会編成を基本としていた。焼畑は火入れをして森林を焼き払い，灰を肥料として3～4年は輪作して開墾する。地味が落ちると放棄して休閑地とし，森と大地が再生するのを待つ。これを「回帰年」といい，20年くらいの間隔を置いて地味が復活すると再利用する。移動耕作で最も大切なのは周期性のサイクルで，大地を特定の間隔を置いて活性化させ，森を再生させる。焼畑は労働生産性が極めて高いが，土地が十分にあることと，移動を前提に生活することが条件である。現在では政府の

政策や圧力，焼畑は粗放な原始農法であるという偏見のために，定住化が進められ，水稲耕作主体の一年が生産の単位になりつつある[14]。しかし，焼畑を物質的基盤としていた意識は残り続けており，祖先祭祀の牯臓節では古来の生産様式のリズムを復活させ，漢族の暦法に同調させて聖化した周期を作り上げ，十二支による原初回帰という再生観を取り込んだのであろう。祭日の設定，執行年は丑年や寅年，子日や卯日などと決定するのである。

他方，12という数には漢族にはない聖数の意味もある。例えば，この地域に伝わる銅鼓の表面には，中央の文様の光芒が12あり，太陽の光線を表すと言う。また，雷山県にはタチャ（達恰）とシァチャ（沙恰）という兄妹が12個の太陽と月を金で鋳造したが，暑いので弓矢を発明して射落としてそれぞれ一つにして結婚した。三年後に肉塊が生まれたが，12個の卵に変じ，そのうちの6個から人間が生まれたという話も伝わっている［百田 1999：233］。胡蝶媽媽が12の卵を生んだ，黔東南に来て12の集団に分かれた，木鼓の長さを六尺で直径一尺二寸にするという伝承や，牯臓節の日程を封寨開けの日まで含めて12日間とする村があり，計画郷加両寨では牯臓師を12人とするなどの伝承を合わせ考えると，12という数は苗族の聖数であると言えよう。原初や始源に戻る再生観を籠めた数字で，それによって新たな活力を取り戻すのではないだろうか。その究極の原動力は，女性の祖先，女性始祖に求められ，女性原理を介して大地と死者と人間の三者が一体化して共に蘇る。祖先祭祀は大地・森・水などの自然と社会秩序を結び付け，原初の神話を再現し，祖先の生活，特に焼畑のリズムや生活様式を想起させる。そして，目に見える形で祖先と交流する。祖先の生活を偲ぶ生産用具を提示して，祖先の仮装による出現を演出し，祖先の生活を全面的に追体験する。大地とのつながりを確認し，作物の豊作や狩猟の豊猟などの豊饒多産も願う。若者たちの性的放縦もこれと感応する。その根源には生命の源としての自然の豊饒性への信頼があるのかもしれない。牯臓節は死を克服して生へと反転させ，この世に生きる者の繁栄の持続を期待する祭りでもある。

(4) 現世でのたのしみ

現在では生産様式は劇的に変化し，死者や祖先の霊魂を迎える意識は弱くなった。しかし，大規模な供犠によって，村人が牛肉という最上の富を共食し飽食する機会をたのしむという慣行は継続してきた。この慣行は，アッサムのナガ族（Naga）からスラウェシのトラジャ族（Traja）に至る東南アジア大陸部から島嶼部の各地で展開する供犠による「勲功祭宴」（feasts of merit）の伝統につらなるものかもしれない［レフラー 1972］。古層や基層の文化とまで言えるかどうかはわからないが，楽しく食事をして酒を飲み，大い

に歌い踊る，平素の辛苦の生活とは異なる飽食の時である。そこには気分転換を共感し合う村人の自然な姿がある。しかし，変化は確実に浸透し，あの世の祖先を和め楽しませる目的であった盧笙舞は，現在ではただの楽舞であり，若者や壮年，男女を問わず，現世のたのしみを享受する大いなる機会となった。かつては豊穣祈願の様相もあり，男女の性交を模擬的に表すような仕草が演じられるなど意味性が付与されていたようだが，現在では消滅した。牯臓節では古瓢舞や対歌など若い男女が交流する社交の場には事欠かない。しかし，現在は出稼ぎが増えて，日常生活では男女共に町や都会に出て働いており，一年に一回か，数年に一回の大きな行事がないと村には戻ってこない。村の中に常に沢山の年頃の娘がいるという状況ではなくなった。こうしたことから，今回の牯臓節は，村と村，地域と地域を大規模に結び付け，出稼ぎで都市に出た若者同士を巡り会わせる貴重な機会になった。祭りの最後に行われる「封寨」は，若い男女の交際の絶好の機会で，死から性へと焦点は移行する。村の未婚の若い男女を全て外部に放逐して，自由な恋愛の機会を与え，好ましい相手を見出す時間を作り，性的な放縦が許容される。男女の若い恋人が生まれ，結婚し子供が生まれて子孫を存続させる願いがある。新たな男女の結び付きで生命力が宿り，村の社会的再生への期待が籠められる。死が繁栄を生じさせるのである。「封寨」には祖先と共にやってきた荒々しき死霊たちや危険な霊を外に追い出す目的もあったが，その想いは薄れている。いずれにせよ，牯臓節の期間中は，村の背後に雄大に連なる山々には若者たちが集い歌をうたう姿が一日中見られる。通常は定期市しかない地域間交流の場が，牯臓節では一挙に拡大し，大自然の中で展開する。婚姻は村落内婚の傾向が強いが[15]，これを開放する契機が大規模に作り出される。牯臓節は世界観を表出する観念的な場であるが，現在では生者たちの祭りとして，食や性を通して社会の存続を図る，この世での実践に意味を見出す方向へと変化してきているようだ。

(5) 観光化

今回の牯臓節に際して来賓としてやってきた苗族学会の人々は，24日に行なわれた牛塘での「傘」を引き回す「大型祭幡遊塘」に先立って挨拶した。その内容は大規模な祝賀行事が開かれることへの賛辞であったが，祝賀文には，三都水族自治県苗学工作委員会名義で，苗族を「歴史悠久，世界性的民族」とたたえた後に，「小脳の苗族は労働をよく行って勇敢であり，風情は古風で，文化芸術は独特である。改革開放と開発が進む西部地区では，苗族の研究を進めると共に経済を発展させるべきである。苗嶺山区の民族文化の旅遊資源を開発して，民族の経済を発展させ，貧困を脱して経済的に豊かにするための有

利な条件が作られた」と記されていた。この行事の意味を説くこともなく，祖先祭祀として死者との交流をはかることにも言及しない。霊魂や他界といった言説は消えうせ，極めて現世的な欲望に人々の願いは集中する。村の中の行事は，常に中華人民共和国という国家の中に位置付けられ，宗教性はその外観だけを受け継ぐことで存続を許される。盧笙舞の行われる跳月塘はバスケットボール場となり，赤い国旗が翻って，その前には小学校がある。スポーツ・国家・学校の三点セットは集落の共産化の象徴であり，国家の動きと連動して大きく変化してきた村の運命を指し示している。現在の最も大きな願い事は経済発展であり，苗族の行事を「文化芸術」という西欧由来の概念にあてはめ，「旅遊資源」として開発の手段とするのである。鮮やかな刺繍の民族衣装，華麗な銀飾り，優雅な盧笙舞，綺麗な幡（特に興華郷），村落景観などを資源として活用しながら，外部の者を呼び込み現金獲得の機会を得ようとする。全てが金で動く時代にあって，現金収入を得る機会に乏しい農村が生きて行く活路として確かに観光は一つの方策である。90年代に入ってアンチモンの発掘で一時期は経済的な潤いを得た村人にとって，もはや後戻りは出来ないのであろう。しかし，アンチモン開発が村人の中に利権をめぐる争いを激化させたように，観光も人々の貧富の差を拡大し，村人の心を荒廃させていく可能性が高い。文化概念の安易な拡大と，開発という名の暴力との危うい結合が創造と破壊の間を揺り動かし続けるという，現代世界の大きな矛盾に満ちた関係性のミニチュア版がこの村でも展開しようとしている。

(6) 社会組織と民族意識の再編成

祭祀を運営する社会組織は，現在では村長や共産党書記などによる村の政治組織が中核にあり，これに牯臓頭が組み込まれる形をとる。村という地縁が基盤であるが，行政組織を通して社会主義的な政治体制の末端部として統制されている。共産党の党組織も祭祀の中に組み込まれて地縁を支え，村の統合に貢献し，政治性は民俗の中に溶け込んでいるかのようである。各地の報告によれば1949年の解放以前，或いは一部は50年代まで，木鼓は父系リニージ（lineage）ごとに保持されて祖先を祀る儀礼の中核にあり，血縁を基盤とする集団が祭祀の運営にあたった。この祭祀は系譜上は父系の祖先や死者，究極には神話的な女性始祖を祀ることが目的であり，社会的基盤は木鼓を保持する人々にあった。苗族の研究者が「鼓社節」と表現した根拠である。言い換えれば，父系リニージを統合し，さらに始祖を祀ることでクラン（clan）の結合を再確認する。しかし，解放後，国家の中の少数民族の一員に再編成されて，社会主義下で血縁の権威が否定され，土地国有化，人

民公社化，文化大革命，生産責任制への移行など社会経済が大きく揺れ動く中で血縁の紐帯は弱まった。そして，大量の水牛を殺戮する牯臓節は50年代に，経済を破壊するとして禁止された。しかし，改革開放後の1979年に施洞で復活しており，地元での根強い支持がある。その基盤は最後まで残り続ける「遺族の共同体」であり，死者と生者を結ぶ記憶の絆なのかもしれない。大きく変貌しながらも，父系リニージの残存を核として祖先祭祀は継続し，この機会を通じて親族・社区・村落などの成員の紐帯が強化される。父系親族集団という男性中心の社会編成に対して，女性は祖先祭祀という実践の中核にあって相補的な形で均衡を保つ。最後には，社会の富の蕩尽によって，財産を平準化し，神霊との願掛けを果たし，再び次の牯臓節へと動き出す。現在では，苗族居住地の各所で牯臓節が復活し，これを機会に地域間の交流が活発化して祭祀圏が拡大した。最近では情報が広く行き渡るようになって，牯臓節が苗族の生き方を示す民族行事として再発見され，民族再生運動の基盤にもなってきた。牯臓節は苗族独自の祖先祭祀として，「民族性」，エスニシティ（ethnicity）の発露として，民族のアイデンティティの中核に組み込まれたのである。民族識別以来約50年を経て「民族」意識は定着してきたが，今回の苗族学会の関与に見られるような外部からの権威付与は，更に民族意識を強化させることになるであろう。

(7) 計画郷加両寨との比較

小脳の牯臓節と他の地域の牯臓節を比較して，今回の事例を相対化することが出来よう。1996年12月に月亮山の計画郷加両寨で行われた牯臓節は徐新建が詳しく報告し［徐1997，1998］，筆者も2000年11月に現地を訪れて聞書きをしたので[16]，簡単に比較をしておこう。加両寨は95年現在で上寨56戸と下寨34戸からなり人口は880人であった。祭祀の日程については既に述べたが，その内容の特色は祖先を偲ぶものが多数使用されていることであろう。例えば，牯臓師は黒帕（ターバン）の上に魚と麻を置くが，これは魔よけであると共に，魚は先祖の漁撈生活を，麻は魚網を意味する。麻糸は先祖が辿って来た長い旅路の「千山萬水」，衣装の上の波浪形は「大海波濤」と，移動途中の沢山の山河を表す［徐1998：44－45］。祖先は東方の海の近くで魚をとって暮らしていたが，西方へ移動して多くの山河を越えてきたという意味である。また，盧笙隊は下寨の中央の盧笙坪で舞をまってから村内を巡るが，「古戦旗」が先導し，その後方を紅色の長衣を着て稲の苗と銅鈴を持つ領頭人が歩む姿は，祖先の亡霊が隊伍を先導するのだという［徐1997：128］。その後に牯臓頭と11人の牯臓師が続く。山下の河原にある牛塘で行われる「牛転塘」では，衣装を供物として竹杆に掛けて場内を回り，この時に死者の生前愛用の遺愛の

品を持ち歩いて追憶する。男性の場合は盧笙・魚網・狩猟用具，女性の場合は針と糸・紡錘車・銀飾り（銀項圏・花頭帕・手鐲），商才すぐれた人であれば算盤や帳簿を出す。鋤を持つ人は村の開拓者，木葉笛を口にあてるのは祖先の笛巧者，花帕（花柄の鉢巻）をつけた盧笙は上手な吹奏者を表わす［徐 1997：132－133］。最後に糯米酒を運び出すが，供物を祖先に捧げて恩恵に感謝し，守護を願うのだという。小脳の場合，家の中の囲炉裏で祭品を供物を捧げて祖先を祀る行事が主体で，祖先を偲ぶものを持ち出すことは目立たない。祖先の霊を招く木鼓を造る慣行が失われ，銅鼓は使われず銅鑼に変わっている。祖先との密接な交流よりも究極の女性の始祖が強調されている。

加両寨では牯臓節の間に様々の禁忌を守ることが定められている。祭祀期間中は不吉なことを言わない，野菜を食べずに肉を食べ続ける，牛に悪いことを言わないなどの定めがある。特に祭祀の指導者である牯臓頭は，両親が健在な夫婦を選び，祭祀期間中は儀礼の時以外は外に出ずに家の中に止まり，会話は隠語を使用して，食事や睡眠をほとんどとらない生活を送る。従って，期間中の五日間は一種の夢遊状態となる，言い換えれば軽い憑霊状態になって神霊や祖先との交流を維持すると見られる[17]。牯臓師が盧笙隊を統率する。これに対して小脳での牯臓頭の役割は，草分け筋の者がなるという観念はあるものの，事務的な役割を果たす者であり，禁忌はなく，祭祀期間中は村落内を歩き回れる。神霊との交流を果たすとは言えない。むしろ鬼師が儀礼を司る。総じて，小脳では職能者の専門化の度合いが低いといえるが，社会主義の政策で破壊された可能性も高い。

(8) 広域での比較

牯臓節の各地での共通点は殺牛祭祖で死者を追憶し祖先を祀ることである。祖先祭祀といっても漢族の清明節にあたる墓参は行なわず，墓・位牌・像もない。山や樹木から祖先を迎えて家の囲炉裏を祖先の住処とする。犠牲獣には水牛ではなく豚を使う所も多い。祖先は東方から来たという意識は残り，最後に祖霊を東方へと送り出す。速やかに故地に送り届けて，災いを起こさないようにと願う。また，牛や龍が銀飾りに造形され刺繍に描かれることが多く，牛と龍は同じだともいう。これは共に立派な角を持つことに由来し，権威の高さを表わすらしい。祭りが終わると牛角は保存して家の中に飾り，祭祀の記憶を留め，子孫が栄え世代を受け継ぐ願いが籠められる。牛に対する感情移入の強さは類を見ない。糯米を供え，祖先ゆかりの魚と麻をあげ儀礼用具に楓樹を使うなど祖先との繋がりを表わす。牯臓節は牛と米を基盤に龍を祀る文化圏によって支えられているのである。

月亮山や都柳江流域の牯臓節の特色としては男性が着用する「祭祖衣」がある。雷山の

男性の地味な服装に比べるとその差異は際立っている。これは祖先を祀る衣で，ムカデ（百足），龍，鶏，蝶など神話の主役が描かれ，衣を着て舞い踊ることで祖先と一体になり，神話世界や自然の中に帰入していく。牯臓節には世界の始原に還るという主題がある。「祭祖方傘」にも龍やムカデや鳥が描かれた幡が付けられ，女性の牛角や鳥をかたどる頭飾りが上に付くので，その出現は祖先の顕現にも近い感覚がある。小脳では鶏は屋根の上に造形されて守護神ディオ・デゥ（diot diux）といい日常でも親しみがある。祭祖衣は男女の区別はなく，どちらかと言えば女性風であるのは，女性始祖を祀ることに由来するのかもしれない。しかし，男性は女装するとは言わない。男女の性を超越したかに見える「祭祖衣」は神霊界との交流を可能にする媒体である。貴陽の香秀楼には清朝末頃の「祭祖衣」が展示されており，文様にムカデと合体した龍が描かれ，オンドリ（公鶏）が舞う刺繍が施されて，裾に羽毛がつき，蝶々の型紙が沢山つけられていた。苗族の究極の始祖の胡蝶媽媽[18]を祀る衣に相応しい風体である。この衣服は丹寨付近の作というが，丹寨では胡蝶媽媽を祖先と信じ，現在でも衣装に蝶々の形を織り込んでおり，その加護で災難を減じて子孫に福を賜わることを願う。

苗族の祖先祭祀は各地で個性的に展開する。その幾つかを概観しておく。凱里の黔東南州民族博物館の田軍の説明では，1998年11月に黔東南の清水江流域，台江県の九手罫で行われた牯臓節では，村の背後にある丘の上に登り，供物を捧げた後に，地面に穴を掘って竹で編んで二本交差させて太鼓を掛けるという。地中の太鼓を叩く音で祖先の霊が呼び出される。漢語で表現すれば「地鼓」であり，大地の霊を呼び出すという意識がある。

黔東南の都柳江流域の南方で，月亮山山中に位置する従江県の加勉では1997年11月に牯臓節が行われ，黔東南州民族博物館の研究者がビデオで記録を残している。楊到梁の説明では，この祖先祭祀は三年がかりで二年目にあたる行事とのことであった。一年目の96年には木を切って，魚と山ネズミを供え，村に下ろして木鼓を作り，特別の小屋に安置する。二年目は村内で木鼓を引き回し，最後に家の中に置き，それを叩いて死者の霊魂を呼ぶ。亡くなった人の衣類と遺品を地面に置いて，死者の霊魂を呼び覚まし人々は愛惜に耐えずに号泣する。三年目は木鼓を叩いて，盧笙舞で祖先をもてなし，豚を殺して祖先を送る（この時は牛を殺さなかった）。供物には必ず干魚を添える。化物や野獣，鬼が干魚を恐れるからだという。豚は牯臓頭の所の檻に入れておいたものを上から突き刺して殺し，引き続いて村の各家で豚を殺して共食する。最後に，木鼓を牯臓頭が真夜中に密かに持って村から出て背後の山に登り，山中の岩の下など秘密の場所に納める。地面に埋めるとも言われているが秘儀なので正確なことは分からない。後を振り帰らずに村に戻る。97

年の場合，牯臓頭が同姓集団から男性が一人出て，合わせて女性の代表も一人選ばれて，行事を取り仕切った。97年11月27日には，家の外に棚を作って供物を置き，鬼師（白雉の羽を頭部につける）が唱え言をして茅草で祓って祀った。哀悼の響きの盧笙と木鼓の響きに導かれ遺族が写真を持って行列して広場に向かう。遺族は写真をなでたり叩いたりする。夜の8時過ぎに野外の祭壇の前の地面の上に亡くなった死者の衣服と遺品を置いて，横たわっている人体のように整える。死者の写真は家族の中から一枚ずつ出し，生前に家族に貢献し強い影響を残した人物の写真を死者たちの代表として飾る。木鼓を藁の上に置き，鬼師が叩き始めると，遺族，特に女性が号泣して死者を悔やむ。哀悼行事は三日間続き，最後の日に死者の衣服と生前に愛用品（闘鳥好きには鳥籠，煙草好きには煙管等）を焼いてあの世に送り返す。ここでは死者の哀悼が大きな意味を持っている。

貴州省北東部の松桃地区に居住する苗族，自称コー・ションでは，ポーカ（頗果）という祖先祭祀を不定期に行う。1996年11月に現地で行われた時の説明では，女性の先祖の人形を紙で作って，家の中の囲炉裏の左側に作られた洞窟をかたどる祭堂の中に入れ供物を上げて祀るのだという。人形には女性の衣装を着せて，花模様の布を頭に被せる。人形は人類始祖であり，祖先の霊魂がおさまる場所が祭堂で，その前には樹木を飾り密林の中の洞窟として祖先の生活を再現する。祭祀には家長の母方オジが立ち会うことが望ましく，三人の男性の列席も要請される。シントン（信冬）という楽器を叩いて祈念し，祭詞を唱えて祖先の霊魂を呼び出して祭堂に迎え入れた後，豚を家の外で供犠して祖先に捧げる。祖先が行っていた通りの作法に従う殺害方法をとるといい，木で挟み込んで押さえ込み，血を流さず，刀を使わずに撲殺する。金属器がなく洞窟で暮らしていた時代の殺し方だという。漢語では「打棒猪」と呼ぶ。この祭りの間は，苗語のみを使用することになっており，漢語を話すと祈願は成就しないと信じられている。祖先の暮らしを再現する意図が強く見られ，祖先は女性であるという意識がある。

黔東南の清水江流域の台江県の施洞で改革開放後の1979年にしばらくぶりに行われた牯臓節では，木鼓と銅鼓を叩いて祖先を招き豚を殺して捧げた。人類始祖の男女二体の像を作って祀り，最後に木鼓と共に，村外れの通称「銅鼓山」の山上近くの洞窟に納めた。清水江を見下ろす河の合流点に在る山である。木鼓があり，人形は二体のうち一体だけが残っていたが，人形は性器を露出させた形で放置されており豊穣祈願の様相があった。

黔東南の雷山県の朗徳上寨で1991年に行われた牯臓節では，村の中からアヒルに紐をつけて東西南北の四方の山に登り，立ち止まった所の土を掘って持ち帰る。四方の各山から村に持ち帰ったものを一定の場所で混ぜ合わせる。次に，その土を各家に配って回り

家々では神樹の下に供えて祈願する。苗語でデウォン（dex　vongx），漢語では「接龍」と称し，四方の大地の龍を中央に合わせて守護神に変えて，家族や村内の健康を願うのだという。山から土をおろすと共に祖先も招いてくるので，大地を祀る祖先祭祀でもある。

広西壮族自治区融水県苗族自治県の村では毎年の春節に祖先が仮装して出現する。1993年に調査した安泰郷のモウコウと安陲郷のマンガオの場合には，仮装や仮面で人々の前に出現し，特にマンガオは父母と子供からなる祖先の家族の編成をとり，魚とりや下草とりをするなど，先祖の生活を演じてかつての姿を再現した［鈴木 1994］。男女の性器を木製でかたどったものを下げて，村人に抱きつくなど豊饒祈願もする。祖先の生活の再現は，計画郷加両寨で魚籠を担いだ姿で現れたり，狩猟の真似をするなどの行為と同じである。融水では年の初めにあたって祖先が苦労してこの地にたどり着いたことを偲び，その加護で家畜の安全と五穀豊穣を祈願する。来訪する神霊が強調されると言える。

(9) 結論

牯臓節で交流する神霊は多様である。血縁の祖先（死者，先祖），自然の中の祖先（胡蝶媽媽），究極の始祖（女性始祖，人類始祖），森や樹木，大地に宿る神霊もいる。そして，祟りをなす悪霊や死霊，漢族風に言えば鬼もやってくる。牯臓節の特徴は自然と連動する大きなリズムを生きる中で，死者と生者の関係を再構築し，この世の生活を活性化することであろう。死者の再生と霊魂の故地への送り届けによりあの世との関係も作り直す。人々はそれを「熱い」時を過ごすと表現する。貴州では13年目，広西では7年目[19]などを節目とし，死者供養に合わせて長年の間辛苦して働いて蓄えたものを一挙に蕩尽して飽食に明け暮れる。周期的な甦り，宇宙再生のリズム感，日常と非日常の大きな落差こそ，この世での活動を維持させていく原動力かもしれない。一年を単位としない大きな時間の循環は人生の見方を漢族とは全く異なる多様なものに作り上げる[20]。彼等の中には，死に対して深遠な意味を託しつつ儀礼を実践する人々も，死者への恐怖心や祟りの解消を願う人々も，残された生者の喪失感を埋め合わせる媒体として儀礼を実践する人々もいる。

祖先祭祀は深遠な知識を内蔵した儀礼というよりも，複雑な力の作用を人々の生活の中に浸透させ，観念と実践を生成し変化させる媒体なのであろう。死者と生者を結ぶつながりの感性を復活させて，社会の再生と持続の原動力を作り出す。死という喪失感を埋め合わせる流動的な力の場を生成して，様々な人生の軌跡を万華鏡の如く映し出すのである。しかし，社会の大きな変動は確実にこの儀礼にも及びつつある。牯臓節は恐らくは12年後には思いもかけないような姿に変化するに違いない。今回でさえ伝統が断片化され，一

部が誇大化したようにも見える牯臓節は，記憶の中では反芻され12年たてばノスタルジア（nostalgia）に満ちた憧憬で思い出されるのであろう。いつの間にか経過していく時間のサイクルと人間の記憶との微妙な交渉過程，いわば「生きられた時間」がこの儀礼の最大の主題なのかもしれない。

参考文献

燕　宝　1980「祭鼓節的由来」『南風』創刊号，14－16頁。

潘　光華 1981「苗族鼓社祭」『貴州民族研究』1981年第4期，47－57頁。

潘　光華 1983「苗族祭鼓辞」『貴州民間文学資料』第61集。

徐　新建 1997「苗族祭祖—月亮山牯臓節考察—」『民俗曲藝』第110期，財團法人施合鄭民俗文化基金会（台北），111－154頁。

徐　新建 1998『生死之間—月亮山牯臓節—』浙江人民出版社。

貴州民族研究所（編）1983『月亮山地区民族調査』貴州民族研究所。

貴州省少数民族古籍整理出版規画小組辨公室（編）（燕宝整理訳注）1993『苗族古歌』貴州民族出版社。

佐竹靖彦 1968「宋代四川夔州路の民族問題と土地所有問題（下）」『史林』51巻1号，京都大学文学部史学研究会，44－74頁。

鈴木正崇 1992「苗族の神話と祭祀—鼓社節を中心として—」『日中文化研究』3号（特集：神話と祭祀），勉誠社，111－118頁。

鈴木正崇 1994「苗族の来訪神—中国・広西融水苗族自治県の春節—」宮家準・鈴木正崇（編）『東アジアのシャーマニズムと民俗』勁草書房，362－391頁。

鈴木正崇 1995「銅鼓の儀礼と世界観についての一考察—中国・広西壮族自治区の白褲瑶の事例から—」『史学』第64巻3／4号，三田史学会（慶應義塾大学），13－31頁。

鈴木正崇 1999「祖先祭祀の変容—中国貴州省苗族の鼓社節の場合—」宮家準（編）『民俗宗教の地平』春秋社，301－316頁。

谷　泰　1997『神・人・家畜—牧畜文化と聖書世界—』平凡社。

廷貴・酒素 1980「苗族“鼓社”調査報告」『貴州民族研究』1980年第3期。

廷貴・酒素 1981「略論苗族古代社会結構的“三根支柱”」『貴州民族研究』1981年第4期，42－47頁。

メトカーフ，ハンチントン 1985『死の儀礼—葬送習俗の人類学的研究—』未来社。Metcaf, Peter and Huntington, Richard, *Celebration of Death: The Anthropology of Mortuary Ritual*, New York, Cambridge University Press, 1979。

百田弥栄子 1999『中国の伝承曼荼羅』三弥井書店。

レフラー 1972「獣・鳥・魚」（内堀基光訳）大林太良（編）『神話・社会・世界観』角川書店。Löffler, L.G. 'Beast, Bird and Fish: An essay on South-East Asia Symbolism', MATSUMOTO, Nobuhiro and MABUCHI Toichi (eds.), *Folk Religion and Worldview in the Southwestern Pacific*: 21－35, Tokyo, Keio University, Institute of Language and Culture. 1968。

1）清代の擁正帝の時に改土帰留をめぐって紛争が生じ，雷山で張秀眉が蜂起して反乱は18年間継続した。この時に都匀，丹寨，台江も反乱し，その記憶が投影しているらしい。

2）七種といいつつ六種しか挙げられない人もおり，名称も完全に一致しているわけではない。骨架歌とう古い歌の中に女性の祖先が登場し，今回の牯臓節はこれに因むともいう。

3）興華郷擺貝村という大規模な村寨で2001年旧暦11月に行われる予定もあった。

4）三つの毛旋が好ましいとされる。従江県加鳩では「五旋牯牛」，丹寨では「四旋牯牛」を好む

という［徐 1997：136］。

5) 今回の同行者は，范禹氏と呉正彪氏（苗族，丹寨。普安生まれ）と百田弥栄子氏であった。各人からの御教示に感謝申し上げたい。なお，三都からは写真家の王何以氏が同行した。王氏は『神秘古老的祭礼—小脳村苗族牯臓節見聞録—』という見聞記を書いたが，公表されていない。

6) 僻地は送電線が長く延長されるので電気料が高いが，こうした場所の現金収入は少なくて電気料が払えないという矛盾がある。

7) 銅鼓は大躍進（1958 年）の時に供出し，木鼓は文化大革命で失われたという。黔東南に伝わるような木鼓が銅鼓に変わったという伝承は聞かなかった。

8) 鬼師は家の祭祀に関わり，祖先祭祀以外では，病人の病気直しが多く，家の戸口に白紙と棘のある草（芭茅草）をつけて祈願し，魔物が入らないようにしたり，卍（sed）を書いて貼る。

9) 計画郷加両寨では「領頭人」が色鮮やかな衣装をまとい，手に法器や銅鈴，栽培した苗を持って回った［徐 1998：33］。

10) ムカデや龍の伝承については，百田弥栄子が詳しく考察している［百田 1999］。

11) 計画郷加両寨ではあの世に行く糧食の意味とされる［徐 1998：62］。

12) 燕宝は台江で唐徳海と姜開銀の語ったものを整理した［燕 1980］。潘光華は丹寨の苗族の李済欠が語った由来伝承を主として整理しており別の内容である［潘 1981，1983］。

13) 牯臓節ではオスの水牛のみが使われる。一般に水牛は水田，黄牛は旱田を耕す。

14) 三都水族自治県の水族に伝わる「鶏と稲」という話では，月亮山には当初は稲がなかったが，鶏が天上から稲の種をもたらしたという。間接的に稲作が後世に導入されたことを示唆する［百田 1999：13］。

15) 村内での近親結婚のためか盲目者や聾唖者が多いという弊害がみられるようだ。

16) 1999 年に榕江と八開を結ぶ道路の途中から当地まで自動車が通える道路が完成したが，同年 7 月 2 日の大洪水で崩壊し，再度作り直して 2000 年 4 月 22 日に開通式が行われた。電気の導入は 98 年である。今後は急速に変貌を遂げると思われる。なお，2000 年 12 月 3 日（旧暦 11 月 8 日）から 7 日まで，計画郷加去村（戸数 146, 人口 625 人）で 40 頭の水牛を殺す牯臓節が行われるという情報を得たが調査出来なかった。

17) 楊方明によれば，禁忌は祭祀の終了後も続き，三年間走ることを禁じる，ものを手に下げて持つことを禁じる（担ぐことはよい）などの規制が付く所もある。そこで牯臓頭を積極的に引き受ける者がなくなり，籤や占いで決めるようになってきた。

18) 少し離れた所に怎猛寨があるが，ここは牯臓節には参加しなかった。

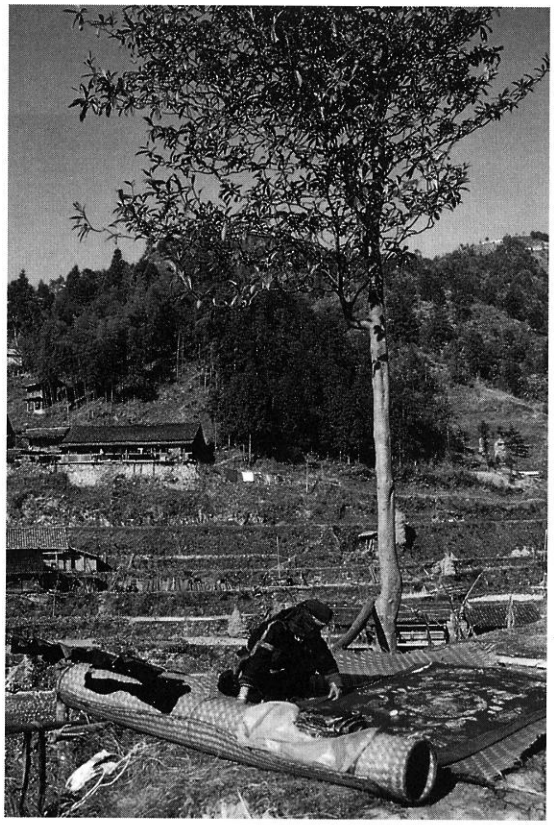
19) 広西の融水では，漢語で拉鼓節と称して七年目に一回行うことが多い。

20) 広西の南丹の白褲瑤は葬儀に際して，多くの銅鼓を叩いて死者を慰撫する。これも膨大な富を投入する死の儀礼で，葬儀を巨大なものに生成した［鈴木 1995］。

図版１　小脳村の中心部を望む。

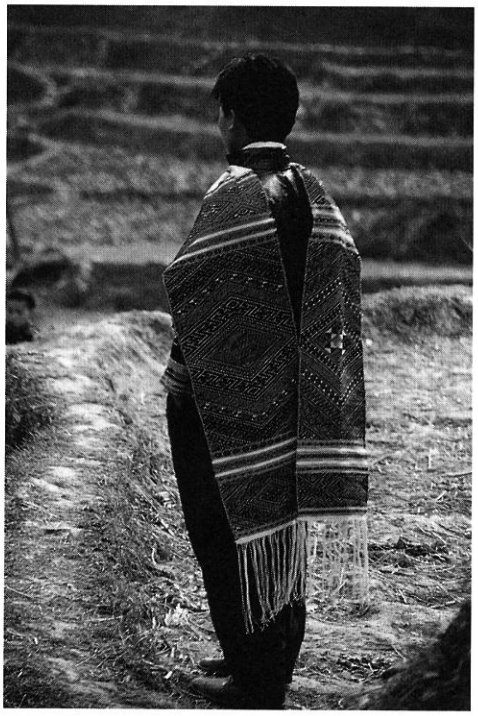
図版２　女性たちの水汲み。

図版 3　家の中での団欒風景。

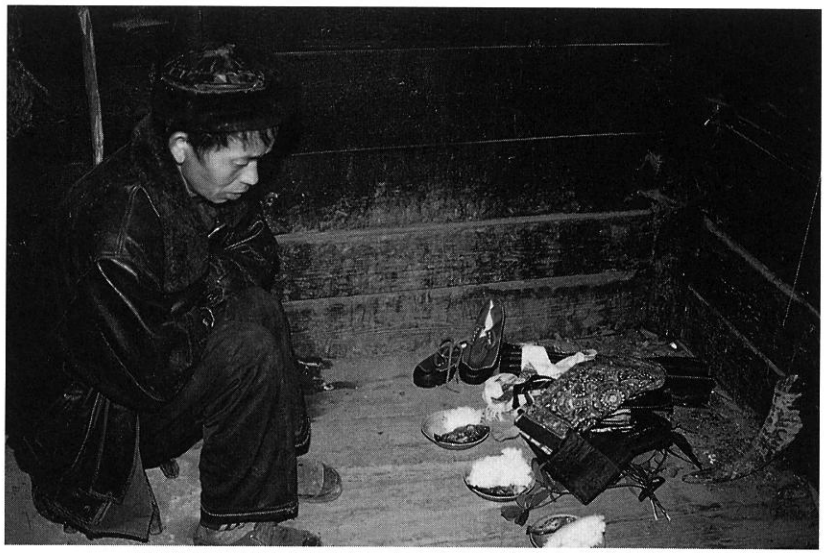


図版 4　祭りに備えて刺繍に手を入れる。

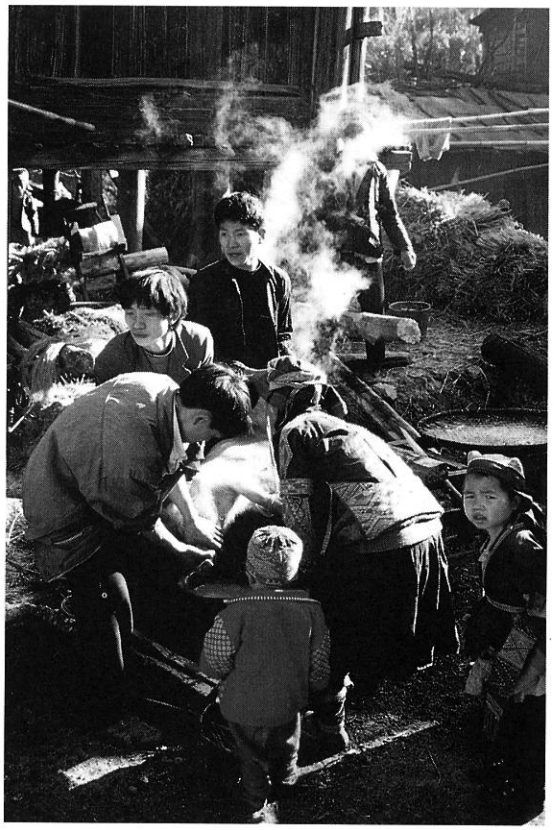
図版 5　祭祖衣。神話世界を描く。



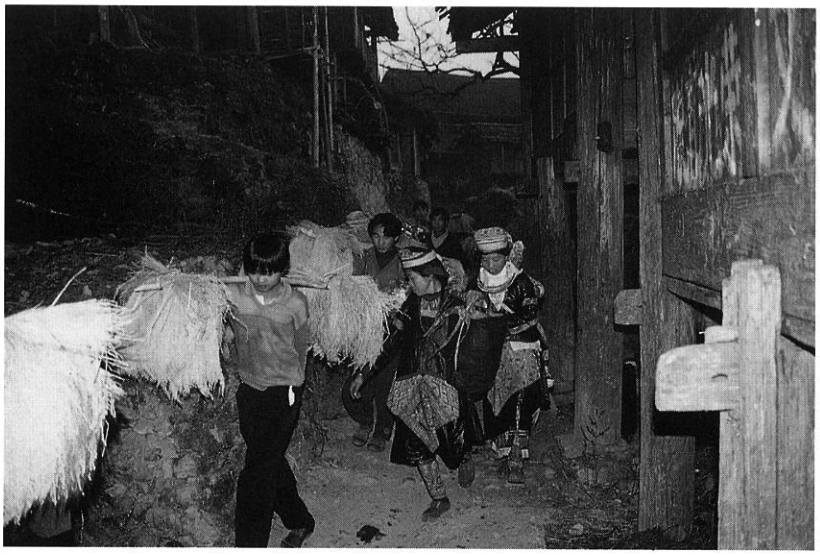
図版 6　男性の盛装。紺色の刺繍布を掛ける。



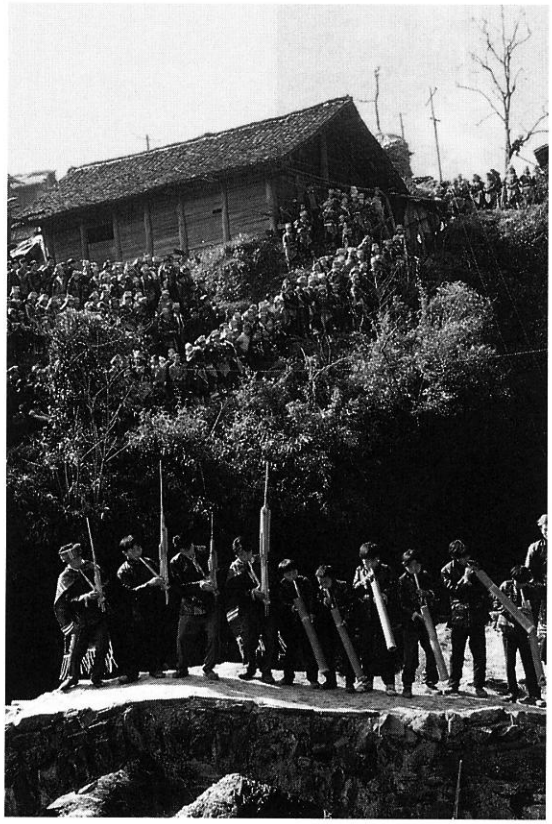
図版 7　家の中で祖先を祀る。



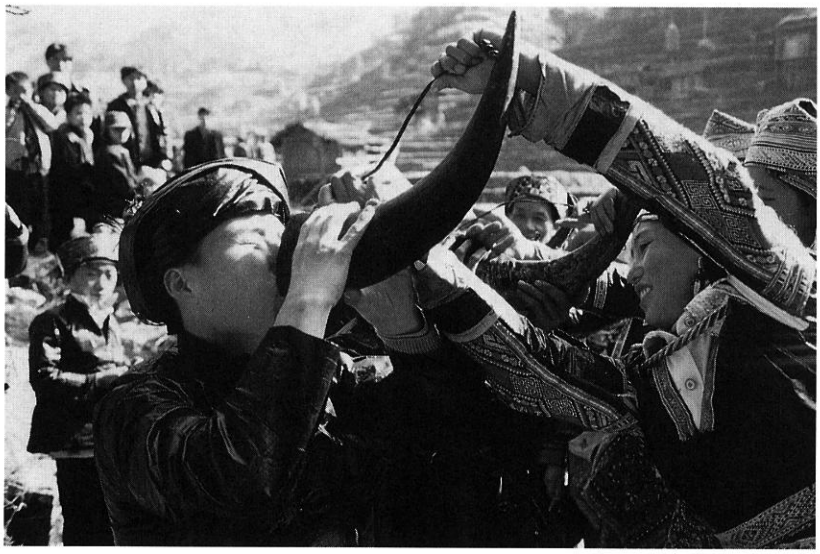
図版 8　豚を各家で殺す。



図版 9　稲や土産を持ってくる。



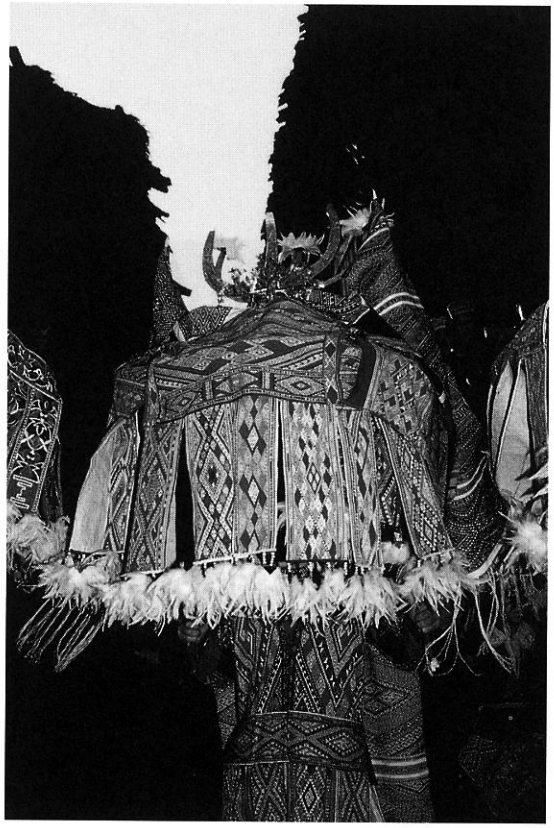
図版10　盧笙で客人を出迎える。



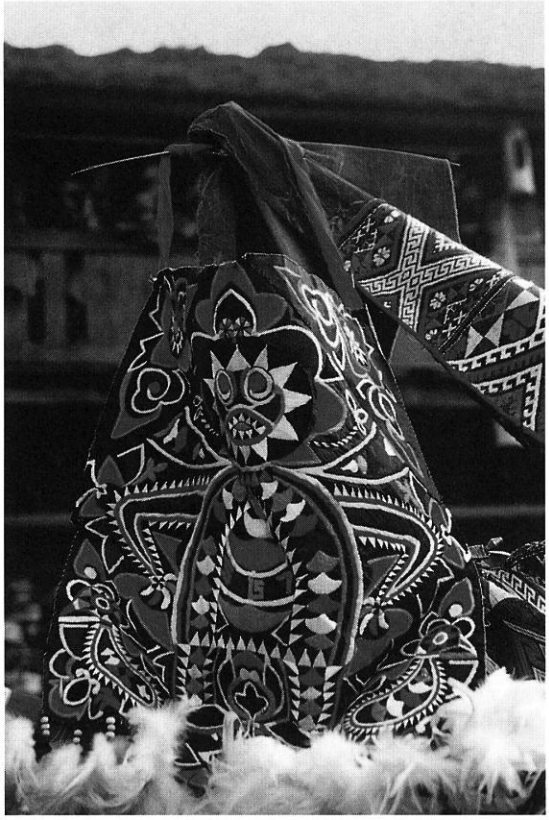
図版11　牛角杯でもてなす。

図版12　牛塘に現れた祭祖の行列。

図版13　祭祖衣を着て盧笙を吹く男性たち。



図版14　祭祖方傘と幡。



図版15　人面をかたどる祭祖方傘。

図版16　ムカデ龍を描いた祭祖方傘。

図版17　水牛を引き回す。

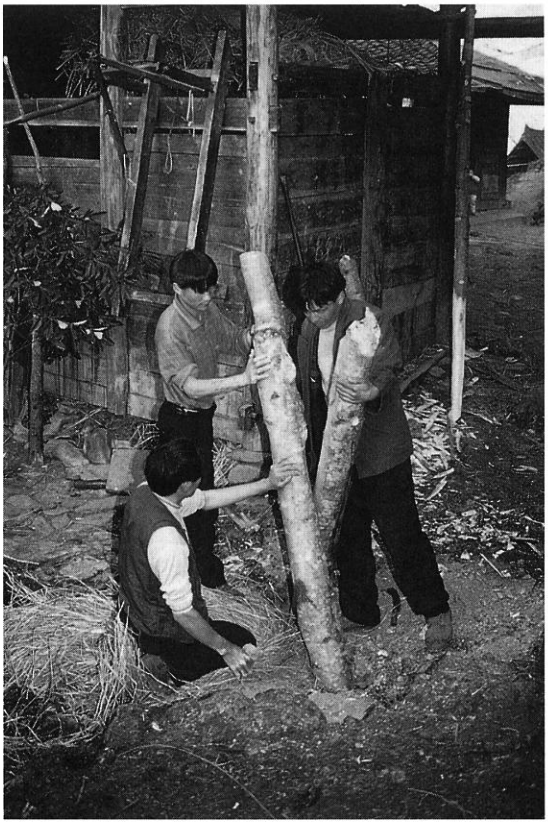
図版18　女性による祭祖の舞。

図版19　古瓢琴をかきならす。

図版20　跳月塘での盧笙舞。

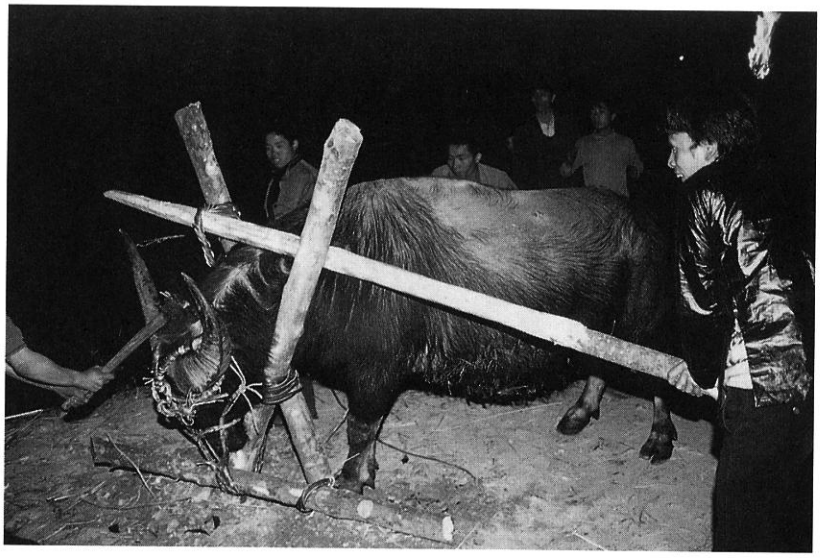
図版21　牛塘に向かう水牛。

図版22　牛塘での水牛の最後の引き回し。

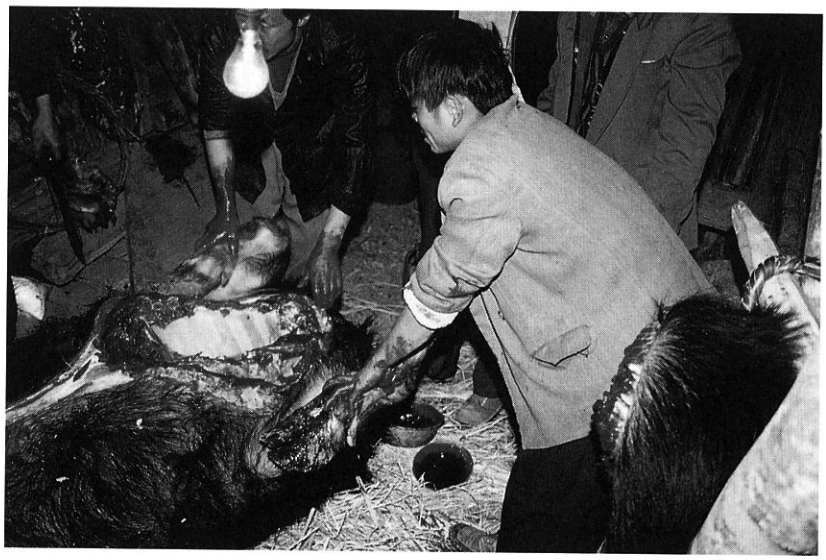


図版23　殺牛のための木を用意する。

図版24　水牛を殺す。

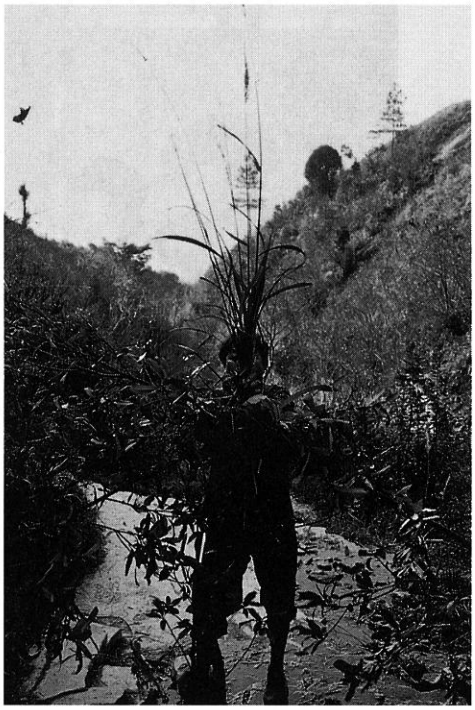


図版25　水牛を殺す。



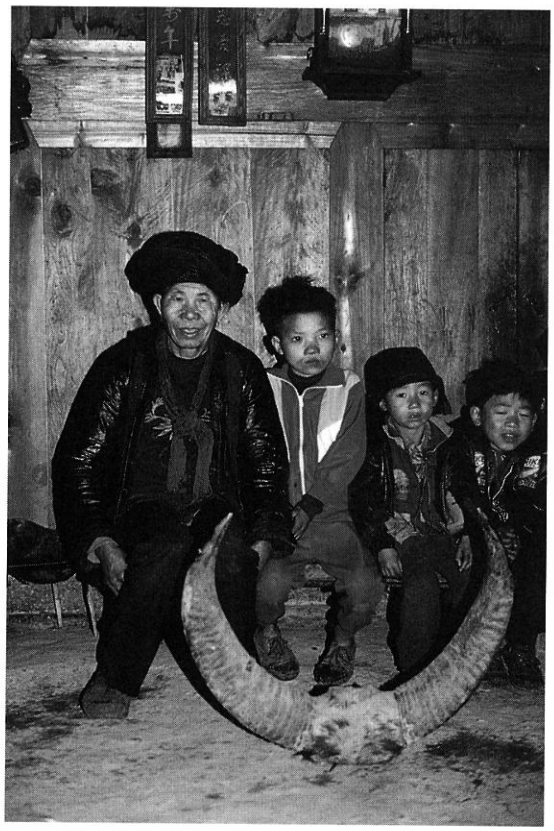
図版26　水牛を解体する。

図版27　肉をお土産に持ってかえる。



図版28　封寨で村を閉じる。

図版29　山腹での若い男女の恋愛。



図版30　記念の牛角を飾る。